
終わり始まる物語

冬雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わり始まる物語

【Nコード】

N3221C

【作者名】

冬雪

【あらすじ】

学園力オス第一弾。《Ⅰ》と呼ばれる正体不明のシステムにより、《学園》という名の箱庭に送られた、とあるいつまで経っても始まらない少年が、どこまで行っても終わらない少女に助けられ、人間に至る軌跡を描いた物語

†プロローグ†

†プロローグ†

あるいは、二人の關係に意味などなかったのかもしれない。
どうしようもなく人間味に欠け、しかし実像だった少年。
どうしようもなく人間味に溢れ、しかし虚像だった少女。
その出会いは必然であり、故に別れもまた必然だった。

冷酷に判ずるならば、全ては偽りだったのだから。

伝え合った言葉も、繋ぎ合った手のぬくもりも、分かち合った時間も。

だけどそれを 一片の価値もなかったと、誰が笑えるだろうか。

弱さ故の依存だったかもしれない。辛さ故の逃避だったかもしれない。

それでも。

今にも崩れ落ちそうな日常を保とうとした、崩れ落ちてしまった正常を取り戻そうとした、彼らの、彼女たちなりの、精一杯の抵抗だったのだ。

どんなに無様でも。どんなに愚かでも。

墓標のように整然と立ち立てられた生の証を、一本一本慈しむその作業は、灯籠流しと例えるには残酷過ぎる現実の中で。

願わくば。

この終わりに臨む少年少女にどうか、人間らしさに満ちた祝福を

†プロローグ†（後書き）

相当久しぶりの投稿です^^；

なんていうか、プロローグを見ていただければおわかりなると思いますが、タイトルのように爽やかな作品にはならない方向です。ミスマッチの妙というには、あまりにも対極です。ねじれの位置です。そんな感じで、不特定に更新していく予定ですので、どうか生暖かい目で見守ってやって下さいm（＿）m

第一章 †箱庭には二匹の小鳥†

第一章 †箱庭には二匹の小鳥†

(One funny day)

0

孤独と書いてヒトと読み、
一人と書いてゼロと読む。

これは、俺がヒトになるまでの初めの一步。

1・孔谷透くうや とおる

色褪せた記憶を手繰り寄せ、最古の足跡を思い出す。
到達したのは、世界の天辺。小さなこの手を伸ばせば、きっと太陽に灼かれるだろう。

目の前には、一人の少女。逆光で表情がうまく読み取れない。怒っているようにも、悲しんでいるようにも、あるいは、喜んでいるようにも、見える。

俺の問いに対し、少女は全く予想外の返答を寄越した。それこそ、天地が逆転したような、信じていたもの全てが嘘だったような、世界が初めから反転していたとでも告げるような、物語が終わりから始まるような、明確な拒絶だった。

呆然と立ち竦む俺に、少女は握手を求めるように手を差し伸べた。

その二指は、世界を潰した証として、茜色の黄昏よりなお赤い血糊に濡れている。

風は吹けども無音の世界の中、不意に、彼女の唇が形を変える。無造作に作られた、この世全ての価値を重ねても到底届かない美しさ。

そして彼女は。

二度と忘れようのない一節の旋律を、穏やかに紡いだ

「……くーや、どうしたの？」

気づけば、少女の顔が頭上にあつた。

「別に、何も」

思考を中断して、現実感を取り戻す。丁度一段落ついたところだったから、腹立たしさは感じなかった。

固くなった首をほぐす。一面に広がる、所々に綿飴を乗せた群青の壁。眩しくて直視できない太陽は、しかし少女　遠辺みつき（とおのべ　みつき）の背を擦り抜けて、目覚めを促すべく陽光を放出してくる。

「みつきこそ。今、授業中だろ？」

何故ここがわかったんだ、とは聞かない。屋上に上ってすぐの梯子の先にあるここは、屋上の真ん中に聳え立つ、後から取って付けたような時計塔が日光を遮ってくれるお陰で快適に睡眠を取れる、俺の特等席だから（生憎、今は角度が悪いみたいだけど）。本当に見つかりたくないときは、他の場所を選ぶ。

「もうお昼休みだよ。今日は久しぶりの部活だから、くーやがいないと寂しいな」

……俺がサボるのを見越して、釘を刺しにきたらしい。いい判断だ。

「別に、俺がいなくても問題ないだろ？」

「うん」

……あっさりと即答された。少しげんなりする。みつきは、俺の心中を知ってか知らずか、無邪気な笑顔になる。

「でも、いないとわたしが寂しいよ」

「……大丈夫。行くよ」

何を言う気も失せてしまった。

不定期に開かれる、部活とは名ばかりで、実質的な活動は皆無に等しいただの集会。

だけど、いつも通り活動内容が陳腐なものであっても、あそこにいるメンバーはあらゆる意味で 例えば、俺の推測の範疇を越えた行動を取ってくれる点 貴重なので、部長風に言えば、価値はそれほど下がらない。問題なのは、あくまで刺激値。

俺が乗り気でないのを悟ったのか、みつきは耳元に顔を寄せて、囁いた。

「ちよつと大きな話題だつてさ」

へえ。

それは、また。

その情報のせいとか、はたまた悪戯っぽいみつきの表情のせいとか、心拍数が少しだけ早くなった。

「放課後また会おう、みつき」

……別に動揺を隠すためではないけれど、みつきから体ごと顔を背けて、俺は再び眠りについた。

《学園》。

この学園は、外部の人間にはただそう呼ばれる。その存在意義が他のものとは全く異なるので、特別な名称を付ける必要がないからだ。

広大な敷地、最新鋭の設備、破綻した規律、和気藹々とした空気。そついった点から評価するならば、俺たち世界から外された逸脱

者たちにとって、ここは正に理想郷だろう。

しかし。

俺からすれば　そしてあるいは他の少数の《生徒》にとっても、
ここもまた緩慢な地獄以外の何物でもない。

「救われないな」

誰に言うでもなく呟いた。

特に意味はなかったので、当然、何の感慨も湧かなかった。代わりに、言葉を後追いした思考が、救われない人間がいるとすれば、希望のない人間がいるとすれば、それは間違いなくお前だろう、と冷徹に断言した。

時計塔に住む、大嫌いな少女が言うように。

「希望、ね……」

改めて考えるまでもなく、俺に一番相応しくない言葉だ。
始まりがあるから終わりがある。仮定が条件が定理があるから結論を導ける。

ならば。

そもそも何も発生させることのできない俺に、結果なんてありはしない。
キボウ

人気のない、長い廊下を闊歩する。窓の外では、野球やらサッカーやら、名前も知らない同胞たちが高校生らしい青春真っ盛りな部活動に勤しんでいた。自我を保つための上辺だけの馴れ合いとはいえ、笑い合い励まし合う彼らの姿はとても人間らしくて、羨ましい。

ふと気づくと、窓に映る薄い自分とぼんやり見つめ合っていた。
衝動的に拳を突き出し、鼻ガラスっ面を貫く。

高く澄んだ音がして、俺が割れた。

「もー、駄目だよくーや！」

少し声を荒げて、一緒に歩いていたみつきがぺちり、と俺の額を

叩く。全く痛くなかったけど、心が少し晴れた、気がした。

「つい」

自分を壊してみれば、何か感じるかと思って。

結果はいつも通り。冷たい沈黙が、目の前を通り過ぎる感じ。

痛覚はある。けれど、それに伴う一切の感情が、浮かんてこなかつた。

「清掃部の人呼んでこなきゃ……くーやも来るんだよ？」

「俺も？」

意外だ。

「当たり前でしょ！ 何を始めてもいいけど、後始末はしなきゃいけないの！」

当然だ、と彼女は言った。

なら、それが当然であつてほしい、と思った。

「……わかつた。みつきがそういうなら、そうする」

何も始まらない俺は、熱を感じる赤い右手を軽く振って、廊下にはたばたと痕跡を残しながら行き先を変更した。

処理を済ませて、本来の目的地へ。

和に統一された部室の中央には、針金細工の聖像があつた。

その性質上耐久性に乏しく、しかし設計が余りにも完璧なのと、整備士が余りにも熱心なせいで、いつまで経つても解れることのない完成品。無駄な意匠を一切省いた機能美には、感嘆の念を抱かずにはいられない。

もともと そんな感傷すらも、俺には無縁なんだけど。

「辻宮先輩。ご無沙汰です」

古式ゆかしい和室の中心に正座するソレは、女性だった。作品名を辻宮律。着用する義務のない制服を文句の付けようがないくらい完璧に着こなしている。短く切り揃えられた流麗な曲線を描く髪は、人間的な温かさよりむしろ機械的な無機質さを伝えてくる。瞳孔は

角膜の色と同化し、どこに焦点を合わせているのかを判然としない。まるで、彼女がただ観測し、計測し、裁定するだけのモノであることを象徴するようだった。

畳の上に凜、と正座するその姿は、初見から今まで、彼女というカタチが揺るがずにいることの何よりの証明だった。まるで彼女だけが、時間の枠組みから外れているような。否、というよりは意識的に逆らっている、と言ったほうが近いだろうか。

故に、識別称号を《逆行天秤処女^{ディオール・ディナ}》。

何人たりとも侵すこと叶わぬ、人智未踏の絶対空域。

……まあ。最近は少し、彼女とは別の意味であんまりにも真っ直ぐな人間のせいで、少しずつながら人間味を帯びつつあるんだけど。もったいない。

「孔谷ですか？」

こちらを一瞥し、当然のことを辻宮先輩は尋ねる。

「はい」

「二分の遅刻です」

唇だけを動かし、不満ではなく、事実だけを口にする。彼女の中では、俺に対する怒りではなく、俺の価値を下方修正する作業が行われているだろう。これ以上株を下げると、ただの紙切れと同等に扱われかねない。

「すいません。道端に落ちてたおばあちゃんを拾ってました」

駄目元で自己弁護開始。案外、この人にはこの手の嘘が通用しやすい。確率的にどれだけ絶望な主張であれ、とりあえずは事実かどうか真面目に検討してくれるからだ。

「……………その人の素性は？」

「聞いてません。助けるので精一杯でした」

「あなたがその人を発見したとき、その人はどのような事態に陥っていたのですか？」

「口からタコスが溢れてました。購買の」

「……………どう対処しましたか？」

「代わりに食べました」

「……………どうになりました？」

「ハチミツレモンの味がしました」

「……………その人は助かりましたか？」

「はい。お礼に本場スペイン仕込みのフラメンコを披露してくれました」

「……………証言に矛盾はありませんね」

マジですか。

「……………あなたの言葉が本当か嘘か判断するには、情報量が不足していますので、今回は不問とします。今後は特別な事情がない限り、遅刻は控えるように」

「どうも」

助かった。

さすが、学園一嘘を見破れない女。

あるいは、興味がないのかもしれない。彼女にとっては、俺が遅刻したという、その結果が全てだから。

「みつきさんは？」

「さあ。俺は知りませんけど」

「そうですか」

上履きを脱いで、畳に足を踏み入れる。辻宮先輩の横顔が向かう先には、安物の将棋盤が置かれていて、ついでに、存在感を感じさせない対戦相手がいた。

「あ、五十瀬先輩」

「……………存在感が無くて悪かったな」

五十瀬正義先輩は、いたく傷ついていた。案外ナイーブな性格らしい。どうでもいいけど。

まず目をひくのは、光沢を放つオールバックの髪型。切れ長の眉と横幅のある鋭い双眸は、意図しなくとも相手を威圧する。彼が愛用する厚みのあるオーバージャケットは、部屋の隅で衣紋掛に掛かっていた。彼自身自分の影の薄さを自覚しているらしく、せめて外

見だけは最大限派手になるよう苦心しているのが切実に伝わってくるけれど、残念ながらまだ工夫が足りないようだった。

さすが、《ノーマルエンド空気真人間》。

と、辻宮先輩の細指が盤外の駒を捕らえ、二本の指の背と腹で器用に挟み込み、鋭い音を立てて盤上に打ち込んだ。五十瀬先輩の顔がさらに渋くなる。

「……現状、私の相手になるのはあなたか伊賀奇創兵くらいのもので、本音を言えば少し、食傷気味です」

局面は、彼女の素朴で辛辣な事実に裏づけられるように、壊滅的だった。

五十瀬先輩の陣形は原型を留めぬほど崩され、守られるべき王は丸裸で敵陣の真っ只中。一方、辻宮先輩の王は臣下により磐石に守られ、戦場を遠巻きにして余裕綽々といった感じだ。

要するに、格が違う。

一手一手の価値の高さを競うゲームで、彼女に勝つのは困難を極める。

ふむ……でも、ここですればなんとかなる、か……？

気づきにくいけれど、逆転の兆しを窺わせる手が、なくもなかった。

「……投了を薦めます」

しかし、今の一手により、もはや形勢は覆らないと確信したのか、純粹に時間削減のため、軍門に下ることを進言する律先輩。五十瀬先輩も異論はないようで、

「……律。今日はここまでにしよう」

投了ではなく、一時休戦を申し入れた。

「……それは投了ですか？」

表情を曇らせる辻宮先輩。相手の不甲斐無さよりはむしろ、曖昧な態度を不快に感じたらしい。

「……そんなことより、例の件のが大事だろ。何せ、人命に関わる問題なんだからな」

言い訳がましいことこの上ないけれど、後半の穏やかではない台詞に気を取られる。 人命だって？

しかし、我が敬愛する厳格な裁判長は、

「そんなことより、既に決している勝敗を先延ばしにするのは納得いきません！」

遠い誰かの人命よりも、近い勝負の決着を上位と判断した。

「……おいおい」

人間大好き五十瀬先輩、さすがに呆れ気味。 どうでもいいけど、この二人の恋人関係が何故一年も続いているのか甚だ疑問だ。 裁定と博愛じゃ、根本的に価値観が合わないだろうに。

「大体正義、あなたは何故性懲りもなく私に勝負を挑んでくるんですか！？ 鍛錬を積んできたならまだしも、現段階のあなたと私では万に一つの勝算もないことは明らかです！」

「いや……律にだって間違いはあるだろ。 なら、根気よくやればきつと勝機はある」

「間違える！？ それは私の実力を信じていないということですか！ 第一、敵に同じレベルまで落ちてきてもらおうという魂胆が気に食いません！ 男なら私の場所まで登ってくるくらいの漢気を見せなさい！」

おお、珍しい。 クールビューティーが顔を真っ赤にして怒ってらっしゃる。

対して、五十瀬先輩は悪い点を取った答案について母親に言い訳する子供のように口を尖らせ、

「なんというか……ぶっちゃけるとだな、別に、勝たなくてもいいんだ」

「は？」

絶句する辻宮先輩。

「……勝負してるときの律が、一番好きなんだ」
脈絡もなく。

とんでもなく真顔で、五十瀬先輩は呟いた。

「な　　」

スイッチ点火三秒前。

その言葉を理解するのに、たっぷり三秒の時間を掛けて、

「　　あ、あなたは一体何様のつもりですかーっ！！」

辻宮先輩は、一種の錯乱状態に陥った。案外不意打ちに弱いんだよな、この人……。

と、先輩は征服の袖口から折り畳み式の銀杖を取り出し、顔を真っ赤に染め、本気で己が恋人に向けて振り下ろした。

「おっと」

五十瀬先輩は、何事もないかのように軽く回避。杖の勢いは止まらず、将棋盤どころかそれを乗せる机までもたやすく貫いた。今時こんな純情な人も珍しいけど、被害総額は現在6ケタに届くか届かないかといったところだ。部費にだって限りがあるので、自重してください部長。

……仕方ない。嵐が去るまで、後輩らしくお茶でも用意していよう。

「こんにちわー。ってあれ、どうしたの？」

タイミングよく、みつきが帰ってきた。

「ま、いつも通りさ」

肩を竦めて答えてから、お茶の準備を再開すると、みつきは二人のリアル鬼ごっこを眺めて「ふーん」とあうんの呼吸で状況を理解し、俺の作業を手伝ってくれた。

のんびりと雑用する俺たちを尻目に、不毛な争い　　というか一方的な攻撃　　は続く。

「不純です！　不潔です！　不謹慎ですーっ！」

「お、俺は本当のことを言っただけだ！　　というかそれは洒落にならないからしまえっ！」

まさに痴話喧嘩、ただし危険度は紐なしバンジ　ジャンプといい

勝負。

本当に、綱渡りのような関係の二人だった。

台風は無事通過しました。

「……コホン。孔谷。最近の新聞は見ていますか？」

咳払いを一つ、冷静さを取り戻した辻宮先輩は洗練された手つきでお茶をひとすりしてから、うって変わって真剣な面持ちで俺たちを見据える。取り繕え切れていないのはご愛嬌といったところか。五十瀬先輩のせい……もといおかげで、彼女という天秤は少しずつ人間味を帯びつつある。それが俺にとっていい傾向なのかどうかは、言うまでもない。

閑話休題。

「ええ、まあ」

適度な刺激は日々の糧。新聞部が運んでくるニュースは、それなりに暇潰しになる。もっとも、内容がこの学園で起きた事件なことから、そこいらのものよりは面白いに決まってるんだけど。

「それじゃあ、その中で一番興味を惹かれたのは？」

「《白いあくまVSクマくん三号改》」

黙祷部期待の新人が、とうとう熊殺しの称号を得た伝説の一戦だ。

「……どうも、あなたの価値観は理解できません」

「はあ」

そんなこと言われても。

「今日の一面にもなつてたろう。《殺戮鬼再び現る、被害これで五人目》と」

「ああ……ありましたね、そんな話も」

確かに、それなりに興味をそえられる話ではあるけど。

一方的というのは、少しスリルが足りない。

結果がわかり切った勝負なんて、吟味するに値しない。

「それがどうかしたんですか？ あれだけ派手に暴れ回ってたら、いい加減審判部やら執行部に《保護》される時期でしょう？」

この学園を正常の機能させるための最後の砦、あるいは治安の守り手。

規律を遵守させることを目的に動く審判部と、生徒会長の意にそぐわない行為を働く生徒を御する生徒会執行部。いくらこの学園の中でさえ抜きん出た存在でも、ここいる以上、彼らには敵わない。

「それが、今度の手合いはこれまでの比ではないらしいです。ついに先日、懸賞金が掛けられました」

「懸賞金？」

そこまでの そこまでの、異常者なのか。

過去の記録を振り返ってみても、懸賞金が掛けられるまで増長してきたのは三人に満たない。

しかし、これまでだろう。

懸賞金が掛けられたということは、学園内全ての人間を敵に回したということ。ここにしかいられない俺たちにとって、事実上の死刑宣告。

「……成る程。つまり、今日の議題は」

「ええ。元々いつか手を出そうとは思っていましたが、こうなった以上、事態は一刻を争います」

辻宮先輩は、音もなく立ち上がり、制服の袖口から、彼女の腕の長さほどもある長杖を再び取り出し、

「それでは。秩序を乱す不逞の輩に、せめて刹那の救済を」

銀細工を思わせる透徹の音色で厳かに宣言し、罪人に罪状を言い渡す裁判長のように、長杖を机に突き出した。

で。

律先輩は非常に単純明快な策を用意していて、計画はあっさりと完成した。けれど、さすがに日も暮れかけていたし、天候も不安定だったので決行は翌日ということになった。

「それにしても……律先輩、よくやるよな……」

その内容は、誰にでも思いつくけれど、誰一人実行しそうな種類のものだった。まず第一に相手を信用することから始まっているのだから、諸葛孔明もビツクリの戦略だった。無節操な外聞や真偽の定かでない噂を判断基準として認めないところは、彼女らしいと言えばらしいけど。

敵を信じるだって？　なんて　なんて、人間的な発想。
今にも降り出しそうな薄墨色の空を見上げながら、思う。

遙か向こうに聳え立つ、無機質というには威圧的過ぎる巨大な堀を視界の端に納めながら、思う。

隣を歩く、淡々と変化する背景の一挙手一投足に一喜一憂する少女　遠辺みつきの柔らかな手を握りながら、思う。

果たして、俺は人間なんだろうかと。

もちろん、生物学的な意味で括るならば、疑う余地はないけれど。形だって生存可能環境だって繁殖方法だって、一般人となんら変わらないけれど。

恐らく最も生物と無生物とを隔てる要因となるであろう《感情》というものが、一切合財欠けている俺は。

昔からこうだったわけじゃあ、なかったはずだけど。こんな歪な性質になってしまったのは、いつからだったろうかと？

「くーや？　ねえ、聞いている？」

「ん。聞いているよ」

「うそ」

少しむくれたような表情で、俺の鼻先に指を突きつけるみつき。

微風が耳の上で一つに纏められた彼女の髪を悪戯っぽく愛撫し、滑らかな曲線を描く。

「うん。うそだ」

隠しても仕様がないうし、みつきは嘘が嫌いなので、正直に認める。細い指は俺の鼻を優しく押し、変形させた。例によって憤りは感じなかったけど、理不尽だと思った。

「もー。みんなといるときはそうでもないのに、なんで二人きりに

なると無視するの？」

いや、無視してるわけじゃないんだけど。

むしろ俺にとって、一番心地よい時間だ。

学校の帰り、みつきと同じ道をのたのたと歩く。

何一つ感じない非人間な俺と、一切に喜怒哀楽する超人間な彼女。

識別称号《透明な殻を嘆く雛》と、《普通、^{ガイ}普遍、故に至高原石^ル》。

最先端と最後端。始まらない異常と終わらない正常。混じり得ない単一と分かち得ない全一。どこにもいない無痛と、どこにでもいる鈍痛。

それが俺と彼女の立ち位置の違いであり、こうして二人が一緒にられる要因なのだ。と言ったら、きっと彼女は怒るだろう。

笑うべきときに笑えて、怒るべきときに怒れて、泣くべきときに泣ける。

別段特別な性質を持ち合わせているわけではなく、ただ正道を積み重ねただけで構成された彼女は、当然のように怒るだろう。それができる人間だから。

本当に 本当に、本当に、羨ましい。

だから俺は、彼女と一緒にいれば何か変われるんじゃないかと思つて、努力を続けているつもりなんだけど。

成果、上がらないよな……。

やっぱ、救いないのかな、俺？

「そんなこと、ないよ」

…… 呟きが、聞こえていたらしい。悲しみを込めた声で否定したみつきは、不意に俺から手を離し、いつもの道を外れて小さな公園に入った。無言で後に続く。彼女は遊具に駆け寄るでもなく、公園の中央にゆっくりと移動し、まるで舞台の役者のように、くるり、と振り向いた。

「 孔谷透！ あなたはわたしを信じますか！？」

突然の言葉。

思わぬ事態に、思考が数秒停止した。

答えは 考えるまでも、ないっていうのに。

「ああ。信じるよ、みつき」

世界で一番人間らしいお前を、孔谷透は信じています。

だって、お前を疑うんなら。世界で一番人間らしくないこの俺は、一体誰を信じるっていうんだ ?

「なら大丈夫。わたしは、遠辺みつきは 孔谷透は普通の子だって、とっても普通の人間だって、知ってるから」

励ますでも慰めるでもなく。

まるでそれが当たり前のように、言うまでもなく必然のように、繰り返すまでもなく当然のように、揺るぎようのない事実のように。それは、根拠もなければ突拍子もない、宙に浮いた信頼だった。そのあまりの儚さに、そのあまりの尊さに、彼女を直視できなくなる。

本当 なんて眩しいんだ、彼女は。

人を疑うことを知らず、傷つけられた過去は数えるまでもなく無数。

それでも変わらない姿勢は、いみじくも命名師が称したように、何人たりとも歪めること適わぬ原石なんだろう。

加工されることのない、始まりに始まり終わりが終わらない至高少女。

その普遍であり柔弱であるが故の強さに、俺は懂れて。

だから俺たちは、二人で一人だった。

今までずっと。

そして、これからも。

そう、思っていた。

第一章「箱庭」には二匹の小鳥「（後書き）」

第一章です。

実は、あらすじに登場する《I》というシステムは、本編の中ではほとんど語られなかったりします。まあ、《箱庭》の中の人たちには関係のない話ですし。

そんなこんなで、続きます。

第二章 ‡狂喜と呼ぶには純情な‡

第二章 ‡狂喜と呼ぶには純情な‡

(True VS Pure)

2 . 辻宮律

作戦決行日当日、午前十時。

予定の時刻、わたしこと部長辻宮律、副部長五十瀬正義、部員孔谷透、及び遠辺みつきは、教室四つ分ほどの広さのある屋上屋上に時計塔のある普通教室棟よりは、貯水槽しかない一部活棟屋上（こちら側）を場所に指定した方が何かと都合がよいと判断　で殺戮鬼を待ち構えていた。夏だというのにそれほど湿気を感じないのは、季節の変わり目に入っているからだろうか。

「……来ると思うか？」

わたしの隣、正義が神妙に尋ねる。

作戦は簡潔に。

わたしは、全校生徒が毎日必ず見るであろう正門に入つてすぐの掲示板で、殺戮鬼に《会合》を申し込んだ。デメリットは他の報道機関係部活や無責任な野次馬に知られることになる　実際、そこかしこに双眼鏡やら好奇心にぎらついた視線を感じる　ことだが、大した障害はないので放っておく。

《……来ると思うか？》

そう。普通の神経を持った犯罪者なら、応じる訳がない。むしろ、応じてくれないのならその方がいい、とすら思っている。

「……来ないのなら、まだ救いがあります」

自分の罪に負い目を感じているなら。

まだ、引き返す余地がある。

だけど、もし

「あ」

孔谷が声を上げた。

刹那、巻き起こる一陣の風。

「よお。いい度胸じゃねえか、女」

目の前に、噂の殺戮鬼が立っていた。

……そうか。

ここに来た、という致命的事実もさることながら、その表情がどうしようもなく歪み切った笑顔であることで、確信する。

コレには、もう人間としての価値はないのだ、と。

「初めまして、《殺戮鬼》。定刻通りの到着ですね」

「ああ。自慢だが、デートに遅れたことは一度しかない」

抑えきれない愉悦と、抑える気のない殺気の入り混じった鋭い眼光。

夕闇に染まるコンクリートに浮かび上がる、毒々しいまでの漆黒のシルエット。この趣味の悪い服装は、確か。

「……やはりあなたでしたか、神斜大地^{こうさか だいち}」

「呼び捨てとはご挨拶だな？ 辻宮律」

全部活中でも屈指の異常性と凶悪性を誇る、勸善懲惡 否、完全超悪を自負する黙禱部、その期待の新鋭の一。……前部長^{おおよ}から凡その話は聞いていたものの、その限りではここまで逸脱しているとは思わなかった。原因に思いを馳せるような無駄な思考はカットし、ただ認識を修正する。

「弁解があるなら、聞いておきます」

袖口から、愛用の長杖を取り出す。阿吽の呼吸で、隣にいた正義が紐のついた受け皿二つ、それに短い杖を差し出した。

「へえ。デカい天秤だな。それがアンタの武器か」

「質問に答えなさい！」

……準備中の不意打ちを警戒したが、幸いなことに相手に動く様子はない。そういえば、この《殺戮鬼》の犠牲者は全員男だった。

だからなんだ、で済む話だけど。根拠に乏しい憶測は、身を滅ぼす毒になりかねない。

神斜の一挙手一投足に注意を払う。と、不意に彼は

「……そうだな。80 58 82 ってどこか」

どこか聞き覚えのある数字を、順に羅列した。

「……？ …… …… …… つ！！！！？」

反射的に、自分の胸を抱いて後退する。

な この、この男っ！

「な なんて、わかつたんですか！？」

「この技を会得するのに一年掛けた」

なんて凶悪なスキル。

まさか まさか、服の上からス、スリーサイズ見破られるなんてっ

てっ……！！？

「ふふふふ、ふざけないでくださいっ！ わたしは、真剣に、」

「ふざけるだと？ その言い方こそ不遜だぜ、辻宮律。オレは今、

オレが費やしてきた苦渋に満ちた1年間365日、その年月を賭けて宣言した。なら、オレの答えが正か否か、責任を持って答える義務がアンタにはある筈だ。違うか？」

「そ……それは………」

およそ人生の70分の1を消費して得た、努力の結晶。

傍から見ればどんなに愚かしいものだとしても それを一概に戯れ事と決め付け^{たわむ}るのは、間違い……なんだろうか。

……………。

……………。

「……わかりました。あなたの主張に、軽薄さはない。わたしを賭けて、あなたの質問に答えましょう」

「光栄だ」

……………うう。 なんて、こんな公衆の面前で自分を暴かなきゃいけな

いんだろ。でも、これは……そう、真剣には真剣を以って返すのが礼儀なんだから、当然のこと。

「答えは、」

「待った、律」

意外な人物から、待ったが掛かった。

「……正義？」

正義は何も答えず、神斜大地からわたしを庇うように立ち塞がった。

途端。

「おい、男。お前、今何をしたのかわかってるのか？」

周囲の空気が一変する。

神斜がこれまで発していた殺気など、ほんの一端に過ぎなかった。親の仇を いや、それ以上の、その人物が喋るのも動くのも存在すること自体さえ許容しない、とばかりの純粋な殺意が、正義を捉える。

だが、

「お前こそ。自分が何を知らうとしているか、理解しているつもりか？」

基本的に温和で、争いごとを好まない彼が。

人に好意を向けることこそあれ、敵意を向ける方法なんて知らない筈の彼が。

振るう拳は危害ではなく、自衛を第一の信条とする彼が。

その彼が。そんな彼が。

怒っていた。

表には出さずに、水面下で。

神斜大地に勝るとも劣らないほどの、殺気を携えて。

「当たり前だ。その上で聞いている」

「嘘だな。本当に価値を知っているなら、そもそも正確な数値なんて聞く必要もない」

「何……？」

神斜大地の顔に、初めて逡巡らしきものが奔る。

「数値になんの意味がある？ 本質的な問題は、あくまで現実に触れた場合の感触であり、視覚したときの見栄えだ。そんな単純な道理さえ忘れたお前に 律の内情を、一つたりとも渡す訳にはいかない」

確かな決意を秘めた宣言。

それは、何度目かの告白。

しかしいくら言葉に偽りがなくとも、何回も繰り返せば価値が薄れてしまうのは自明の理で しかも本件においては、普段なら（不覚にも）一時的に思考停止状態に陥ってしまうわたしでさえ、彼に対するある種の疑惑を拭い去ることが出来なかった。

え、ていいうか何？

体目当て？

わたしの水面下の葛藤をよそに、神斜大地は、返答にたっぷり三分弱の時間を要した。

「……ナルホド、な。どうやら……オレは、間違った形で理想を追い求めてしまった、つつーことか」

その表情にふざけた様子は一片もない。本気で、己が取るべき道を誤ったことを後悔していた。

「いや、それも違う。正確なサイズが判別できるなら、その形も脳ミス内具現化（ディック・ファンタズム 律は知るよしもないが、一部男子の間で流行中の造語別名、《大いなる妄想》）できる。お前の目指した道は間違いじゃないかったんだよ、神斜」

「……ああ。柄にもなくだが。お前には、もっと早く出会いたかった」

「俺もだ」

当人同士にしか通じ合えない、強固な絆で結ばれた微笑。

もはや二人に言葉はいらず、沈黙すらも安穩だった。

……どれくらい、そうしていただろうか。

立ち尽くす二人は、やがて同時に息を吐いた。

「……だからこそ。お前に、律は渡さない」

「……その決意、しかと受け取った。ならば、」

「勝負だな」

「ああ。勝負だ。……お前の話は聞いたことあるぜ。こと守りに関しては他の追隨を許さない一級品だつてな」

ここで衝突するのが当然であるように、二人は戦闘体勢を取る。

「ちょ、ちよつと待ちなさい！ 元はと言えば、わたしが、」

「アンタは黙つてな」「律は黙つてろ」

「……はい……」

……異様な威圧感に、思わず頷かされてしまった。

「……なんだコレ」

隣で、孔谷がわたしの気持ちを代弁していた。……えっと。わたしは、どうすればいいんだろう？ というかどうなるんだろう？

と、そこで唐突に。

「……オレはお前を突破し、その女を手に入れる。でなければこの命、くれてやろう」

「は？」

この男は。神斜大地は。

命と天秤に掛けて尚、わたしが欲しいと言った。

こんなわたしに。

こんな、デキソコナイノワタシニ。

「……っ」

いけない。少し、ほんの少しだけ、……嬉しいって、思ってしまった。わ、わたしには正義がいるのに……。

でも、

「軽いな」

正義の返答は、それすらも遙かに凌駕していた。

「やっぱり価値を理解してないな、神斜。命だつて？ そんなモノ如きで、律の完成されたプロポーションと釣り合いが取れる筈ない

だろうがっ!!」

激昂。

正義の咆哮は、遙か向こうにある落下防止用の鉄柵を容易く吹き飛ばした。……老朽化していたのが自然に壊れたのだ、と認識しておく。

「ならどうしろって言うんだよ、お前は!」

「単純な話だ。お前の命なんて貰っても意味がない。俺が勝つ場合、終生律に服従することを誓え。お前の一挙手一投足、朝はおはようから夜はおやすみまで、隅から隅まで徹頭徹尾、完膚なきまで余すところなく妥協も休憩も疑心もなく、お前の全存在を賭けて誓え」

「いいぜ。その死合、受けた」

「覚悟を決めろ、殺戮鬼。今日がお前の行き止まりだ」

「来い、親愛なる同胞よ。精々オレを愉しませろよ?」

一瞬にして、臨戦態勢。

………って、ちよつと待って。いつの間にか、わたし、………賭け物にされてるっ!?

「あ、あなたたち、ちよつと」

「ダメだよ、先輩。男には、やらなきゃいけない時があるの」

妙に得心した様子で、止めに入ろうとしたわたしを羽交い絞めにするみつぎ。

「だ、だって! このままじゃわたし、え、あ、あなたは女の子でしよっつ!」

「うん」

「だったら!」

「大丈夫。五十瀬先輩はきつと負けます」

「それじゃ最悪じゃない~~~~っ!」

わたしの叫びは、戦いの結果を看取る薄紅色の空に吸い込まれていった。

3・孔谷透

前置きの長さに反比例するように、決着は一瞬だった。

「はあっ!」「このおおっ!」

両者の初動は同時、しかし明らかに速度差が。

「はぐっ!」

やはり場慣れしているのか　神斜大地の膝蹴りが、五十瀬先輩のみぞおちに突き刺さる。

「こ、の、」「まだまだあああっ!」

みぞおち、みぞおち、みぞおち、下腹部、みぞおち、みぞおち、下腹部、みぞおち、みぞおち、みぞ、みぞ、下、み、み、み……

…沈黙。

……弱っ!

正義の味方、弱っ!

「……ハ。なんつーか、拍子抜けにも程があるんだが」

「あの人は防戦専門で、お前は殺戮専門だからな。相性が悪過ぎたんだ」

返事がないただの屍になった五十瀬先輩の代わりに答える。ちなみに、律先輩は彼の余りの不甲斐なさに思考を停止して石のように固まっている。

「ああ? ……ああ、お前まさか孔谷透か?」

どうやらそこで初めて俺の存在に気づいたらしい、神斜はいたく珍しいものを見るように俺を値踏みする。

「……お前に関しちゃうあ、範疇内か外か、判断しかねるが。まあそれはさておき、だ。おい、女!」

神斜は、呆然と試合　というよりは一方的な暴力の結果を受け入れられずにいた律先輩を一喝する。彼女はバネのように背筋を伸び上がらせた。

「な、なんですかっ!」

「勝ち勝ちだ。約束通り……」

言いかけて、

『　　ダメだよ。その子は、クーヤのお気に入りなんだから』

聞こえる筈のない距離から、何者かが愉快そうに呟く声がした。
ガラスが割れたときに発せられる澄んだ音色のような声に、背筋が凍りつく。

これは　この、声は。

「チイツ！」

最初の反応したのは俺だった。舌打ちと同時に横っ飛び、同時に「え　？」

律先輩の体を強引に引き寄せて、地面に伏せさせる。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴に一呼吸遅れて。

突如、コンクリートの一角が破碎された。

まるで爆弾が投下されたように。

その跡地を探れば　強化された狙撃銃の弾丸を、見つけることができるだろう。

危ないからやらないけど。

死んだような俺とはいえ、死に対しては少し、無知であるという点において、恐怖がある。

「あのアマア……悪同士仲良くしようって言ってたクセに、やるこたやってくれんじゃねえか……」

俺たちには窺い知れぬ事情があるらしい、放たれる弾丸をお互い打ち合わせているかのように次々と回避しながら、神斜は恐ろしく歪んだ形相で向かい側の校舎、その頂点に聳える時計塔を一瞥する

と、俺たちに向き直り、

「邪魔が入った。報酬は後だ。じゃあな」

手短に別れの挨拶を済ませ、颯爽と屋上から飛び降りた。

「……って」

自殺志願者？

銃撃が止んだことを確認してから起き上がり、神斜が去った先を見下ろすと、すでに彼の姿はなかった。すぐ下の階の窓が開いているから、多分そこに入ったんだろけど、少なくとも人間業じゃない。

「……あんなのばつがいるから、ウチの学園が異常視されるんだよ……」

俺たちはただ、ほんの少し、世界に馴染めなかっただけなのに。みんな、いいヤツなのに。

人間かどうかは、別として。

「で……見返りはなんだ？ 《翡翠》^{ヒスイ}」

神斜が見ていた方向に向けて軽く声を飛ばす。ややあって、
『べつにー。今回はただの気まぐれだよ』

まるで普通の距離で会話しているように、声が返ってきた。仕組みは未だによくわからないけど、相変わらず便利な体だ、あいつ。その気になれば、俺が校内のどこにいても会話が出来るだなんて。

「今回も、だろ？」

『むむ、そんなことないよー。わたしってば基本的にビジネスライクなんだからねー？ ……クーヤたちを助けるのは、別に、その、』

「はいはい。後で時間作るよ。それでいいか？」

『……うん。ありがと、クーヤ！ 好きっ』

「どうも」

交渉終了。

相変わらずいい性格してるな、あいつ。

臆面もなく人を好きだなんて、恥ずかしい。

そして、……羨ましい。

「……孔谷。とりあえず、わたしは正義を保健室に運びます」

「あ、手伝います」

「いえ。単純に腕力で言えばわたしの方が上ですし。それに、無意味に人を待たせるものではありません。相手が大事　いえ、危険であればあるほど」

「……そうさせてもらいます」

さすが律先輩。どちらが大事か、よくわかってらっしゃる。

「みつきは どうする？」

ぼんやりと空を眺めていたみつきに声を掛ける。彼女はゆっくりと振り向いて、少し思案顔になって、

「んっ……わたしはいいや。その辺のブンヤさんに感想でも聞い
てくるね」

「そっか」

まあ確かに、彼女にとっては進んで会いたいとは思わない相手だしな。

「それじゃ律先輩……生きてたら、また会いましょう」

俺は、覚悟を決めて校舎内に降りる階段に向かって歩き出した。

俺の中の、誰かを好きになるために必要なこと。

尊敬できること。

他にはないものがあること。

受け入れる価値があること。

受け入れてくれる余地があること。

地球人であること。

人殺しではないこと。

「だから俺は、お前を好きになれないよ。何一つ一致してないお前

翡翠とはな」

『あ、失礼しちゃう。いくらなんでも異星人はないんじゃない？
せめて異邦人くらいにしてよ』

「冗談。世界の他の誰にだって、お前の隣には並べないよ。夢の終
わりが憧れに殺されることだなんて、絶対理解できない」

職業、《^{スケープゴート}極悪人》。

命名師が名付けて曰く、《^{ファスト・ワン}先天的悪性子女》。

それが、この学園^{セカイ}での彼女の記号だ。

『終わるんじゃないよ、完成するの。……そんなにかしいかな？
わたしの考え方』

「考え方というよりは、生き方かな」

『……ねえクーヤ？』翡翠は、寂しげに笑っているのかもしれない。
『ほら、映画だとよく宇宙人が攻め込んでくるじゃない？ こう、
オーバーテクノロジーを駆使してガーツ』

「……まあ、あるかと聞かれれば、あるね」

『でさ、あれって大体今までのかがみ合ってた大同土が手を組んで
力を合わせて解決！ そして大団円！ って感じで終わるじゃない
？ わたし、あれってとっても合理的な方法だと思うの』

「合理的、ねえ……」

敵を欲しがる人間に、淘汰したがる人間に、駆逐したがる人間に、
人類共通の敵を用意してやる。

例えば、世界を人間という種の枠組みで限定するのなら。世界平
和を達成するには、この方法が一番手っ取り早いのかも知れない。

「でも、それだって一時的なものだろ？ 少し時間が経てば、結局
元の木阿弥になるに決まってる」

『終わらないものなんてないんだよ、クーヤ。だったら、価値を時
間の長さで否定するのはなんだか違うと思う』

「じゃあ翡翠は、一秒だけ幸せにする代わりにお前の寿命を五十年
減らす、って言われたら幸せを取るのか？ 今すぐ死ぬ代わりに五
秒だけ律先輩の体を好きにしていって言われたらそうするのか？」

『するよ』

即答。

俺の極端な例え　しかも後半は個人的な希望　に対し、翡翠は、間髪入れずに肯定した。

ああ。やっぱりこの女、狂ってる。

今更だけど。

俺たちもだけど。

「……そっか」

『ところでクーヤは、好きな子とかいる？』

「脈絡もクソもないな」

「いいじゃん」

よくない。

「……別に。そういう浮いた話は、ないけど」

『どうして？』

「どうしてって……こういうのは、人それぞれ時期ってものがあるから、別に急かされる必要もないというか、なんというか、」

『ふうん。じゃ、クーヤはその内誰かを好きになれると思ってるんだ』

あからさまに棘とげのある物言いだった。

みつきには放てないだろう、優しい毒を孕んだ率直な言葉。

「なんだそれ。それじゃ、まるで」

俺が、誰も好きになれないみたいじゃないか。

俺が、誰にも　興味がない、みたいじゃないか。

『違うの？』

翡翠は、聞き分けのない子供を諭す母親のように、俺の内心を見透かしたかのように、微笑したのかも知れない。

「違うよ、全然。律先輩のことは尊敬してるし、みつきは放っておけないし、五十瀬先輩は……とにかく、それは違う」

『あのね、クーヤ。《尊敬》や《心配》と、《親愛》や《憎悪》は全然別物だよ？』

「そうか？」

『前者はね、その人の情報を統合しての、総合的な評価。極端な話、機械にでもできる簡単なコトなの。でも、後者はそうじゃなくて、その一段階上にある　積極的な、自分の中から外に出す、自分だけの意思』

《彼女の人格は希少価値が高い》。

《彼女の行動には警戒が必要だ》。

それは思うというより、判ずるだけの行為だ、と。

一切の評価を切り捨て、感情だけで生きている彼女は、断ずるのではなく、ただ当然のように言った。

そんなことは、当たり前だと。

そんなこともわからないあなたは　わたしとは違う意味で、人間じゃないんだよ、と。

「……違う。俺は」

『なら聞くけど。クーヤ、嫌いな人いる？　自分以外で』

……先手を打たれた。

「……別に、いないけど」

お前以外。

『不気味』

「うるさい」

『異常だよ』

「余計なお世話。なんだよ、嫌いな人なんていない方がいいに決まってるだろ」

『それ、世界が平和な方がいいって言ってるのと、敗者なんていない方がいいって言ってるのと同じだよ？』

つまりは、理想論。

通常ではありえない筈の心境に、無論望んだ結果ではなく、無造作に感情（人間らしさ）を磨耗し続けた末に、俺は達していた。

それは錯覚か。

あるいは、欺瞞か偽善。

『もう十六年も生きてて、しかもこの学園で、嫌いな人がいない？
おかしいよ不気味だよ異常だよ狂ってるよ人間じゃないよ大好き
！』

「……………頼むから翡翠」

文脈を大事にしてくれ。

だからこの女は 嫌いなんだ。ホントに。

4・遠辺みつき

クーヤと別れてから三十分後。

わたしは、とある部室のドアを軽くノックした。

「ようやく来たね。待っていたよ」

軽い材質で作られた銀色の扉の向こうで、幽霊みたいに現実感のない声が応える。

「おじやましーす」

勝手知ったるなんとやら、迷わずドアを押し開け、侵入。果たしてそこには、

「やあ、みつき君。…………へえ、珍しいね。今日は一人かい？」

宇宙の天幕を貼り付けたみたいな深い藍色の長髪。奥底まで見透かされそうな透明感のあるスカイブルーの瞳。絵本の中から抜け出てきたような輪郭の曖昧さを持ちながらも、すぐく存在感のあるその人。新聞部部長、伊賀奇創兵^{いがき ぞうへい}は、舞台の役者がするように笑顔を作った。

「あ、よくわかりましたね」

「そりゃあ、かれこれ一年の付き合いだからね。それで、さっきの茶番劇について僕に感想を尋ねに来た、と言ったところかな？」

「あちゃあ…………読まれますねー」

相変わらず、いつも先のことを考えてる人だなー、と思った。

今日も興味深い声帯だね、という伊賀奇さんのよくわかんない歓迎の言葉をもらいながら、一昔前のオーラが出ている木製のイスに座る。

「それ以外に理由がないからね、単純な消去法さ。……そうだね、一言で言えば」「伊賀奇さんは、数秒腕を組んで考え込んでから、
「全体的なバランスはともかく、部分的な突出度に関しては茂花君の方に軍配が上がる、とだけ言っておこう」

「はあ……………そう、なんですか？」

「うん。間違いないね」

真顔で断定された。

そうなんですか。

「えっと……………他には？」

「他に、だって？ おかしな事を聞くね。先の決闘の中で一番の論点についての言及を終えた今、僕が語るべき事なんてもうほとんど残されちゃいないと思うけれど？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………わかったよ。僕の根気負けだ。割と真剣な意見ではあったけれど、より君の要望に添った意見も述べる。それでいいんだろう？」

「はい。お願いします」

伊賀奇さんは、君は言動の割に冗談が通じないんだったね、と呟いてから、回転式の椅子の背もたれに深く寄り掛かった。

「……………まず、連続殺戮鬼の正体が神斜大地だつて点に関しては、一部の生徒会執行部、あるいは黙禱部ゆかりに縁のある生徒なら知りえた情報で、当然僕も知っていたから、特筆すべき事ではない。そもそも、何もかもが異常なこの学園でさえも、人を殺めようだなんて考える輩は」と云うより、人にそこまで積極的かつ明確な意思を持てる人間は、そんなに多くないし、ね」

例えば、単に世界が好きだけの君や、単に世界で楽しむのが好きなだけの僕とかじゃ無理だよ、と伊賀奇さんは皮肉げに笑う。失礼な発言だと思って頬を膨らませて抗議したけど、いつものように軽くスルーされちゃった。むー。

「まあ話を戻すと、……実際のところ、彼を捕まえる事はそこまで難しくないんだよ」

「え？」

予想外の言葉に、思わず声を上げてしまった。

だって、捕まえられないから、まだ逃げてるんじゃない？

「えっと、……どういうこと、ですか？」

「つまりね。あの『逆行天秤処女』^{デイオル・ディナ}が考えつく程度の策、僕や『不朽夢想』^{ソッキ}あたりが思いつかない訳がない、という事さ」

「ウソツキ……誰でしたっけ？」

「おや、不勉強だね」

いちいち命名部部长さんの付けたちよつとイっちゃってる感じのネーミングを覚えてるのは、この人とくーやぐらいだと思ひマス。でもあの人美人だから人気あるんだよね……別にいいけど。わたしにはくーやがいるもん。

「元審判部部长、現黙禱部副部长だよ。彼はどうせ身内の不始末を見ていられないタイプだから、その内しゃしゃり出てくると思うよ」
でも間が悪い人だから、今回は出番無しかもね、と伊賀奇さんは心底愉快そうに付け加えて、くくく、と苦笑した。

「ああ、あの人かー」

学園年長者の中でも、一番オジサンっぽく見える人。

確か、昨年度ベストオブジェントルマン賞を受賞してた気がする。

「え、でも身内っていつても……犯罪した人なの？」

もう、部活仲間どころの騒ぎじゃないのに。

まだその人を、仲間だと思ってくれてるの？

「ああ。だからこそ彼は、ここに来たんだから、ね」

諦観めいた皮肉げな笑みと一緒に、伊賀奇さんは肩を竦めた。

《だからこそ、彼はここに来た》。

この、世界から切り離された　　ううん、わたしたちの世界そのものになった、この学園に。

「……なんでなのかなあ」

床に目を落とし、思わず愚痴ってしまった。

「ん？」

「なんで……こんなに、みんな、上手くいかないのかな？」

みんな、目指してる道は同じなのに。

ただ　　幸せになりたい、それだけなのに。

きつと、罪を犯した人だって、元を辿れば。

「そりゃあ、皆が、皆の幸せを願っているなら上手く行くだろうけどね。生憎、大抵が望むのは自分の幸せだけだからね」

伊賀奇さんが出した回答は、彼の話にしては珍しくわかりやすかった。

でも　　でも。

「……でも、さ……」

それならさ。

みんなが、他人を自分のように思えばいいと思うのは、わたしだけ……なのかな。そんなことないと、思うんだけど。

「……まあ、辛気臭い、というか詮のない話はそのくらいにしておこう。あんまり愉快じゃあないし、興味ないしね」

伊賀奇さんは、手で弄んでいた飴（いちごミルク味）を口に含み、舌で転がしながら器用に語る。

「結論からいうとね。元々、生徒会執行部に学校の治安を守る気なんてこれっぽちも無いのさ。あるのは、生徒会長、つまりこの学校の最上位統治者の彼女を守ろうという意図だけで、ね」

「……そう、なんですか？」

「当たり前じゃあないか。もつとも、本気で治安を守ろうと思ったらそれこそ生徒全員を個別に隔離ない殲滅しないといけないから、るつから、僕としてはありがたい姿勢ではあるけれど」

「……………」

それは 当然過ぎて、認められない事実だった。
だって、元々、わたしたちは。

その枠組みから逸脱したからこそ、ここに送られてきたんだから。
「連続殺戮鬼の被害にあったのは、全て屈強の男子生徒だ。それだけじゃ判断はできないだろうけれど 彼の、神斜大地とそれなりに深くコンタクトを取った事がある人間なら、彼が或華君以外の女性に手を出さないであろう事くらい見当はつくさ。少なくとも、今の内はね」

そして生徒会長、兼理事長は、女性。

だから 彼がどこで誰を殺そうと、少なくとも彼女は、標的にはならない。………… そう考えてる、ってこと？

「あれ？ でも、さっきの戦いのときは？」

いつせー先輩が代わりにやらなかったら、律っちゃん先輩が殺戮鬼さんと戦うことになってたような。

「女性を倒す手は、何も暴力だけじゃないよ」

ふふん、と不敵に笑う伊賀奇先輩。………… なんとなく身の危険を感じるので、用事を思い出したコトにする。伊賀奇さんは、わたしの嘘を多分見破った上で、そりゃあ残念、ととても楽しそうに別れを惜しんだ。

ドアを開けて去る間際、

「………… これから、どうなるんでしょう」

何気なく、一番聞きたかったコトを、独り言のように聞いてみる。
「さあね。形あるものはいずれ壊れ、命あるものはいずれ失われる。なるようになるだろうに、ならないときはどうしようもない。そして僕は傍観し諦観し、観客として嘲笑する。それだけの事さ」

振り返らなくてもわかる、いつものような憂いを帯びた微笑で、伊賀奇さんは即答した。

「目が覚めましたか」

……気がつくと、物凄く仏頂面の律の顔が間近にあった。

「……くっ……俺は、……負けたのか？」

確か、両者一步も譲らぬ一進一退の白熱した攻防戦の末、お互いに死力を尽くした最後の一撃をぶつけたところまでは覚えているんだが……。

「はい。それはもう、完膚なきまでに」

「いや、後少し俺の攻撃が深く入ってれば」

「あなたの攻撃なんて一度も観測できませんでした。ああそれとも、敵の膝蹴りを鳩尾もしくは下腹部で受ける行為をあなたは攻撃と呼ぶのですか？」

それならたくさん攻撃してましたね、と律。……心なしか、言葉の節々に棘があるよーな。というか、二人きりなのに敬語なのは明らかに怒っている証拠だ。本人は自覚していないが。

「……悪かったな。カッコいいところ見せられなくて」

「っ、違うでしょう！？ そんなことよりも、そんなことよりも　なんであなたは、あんな無謀な賭けを承諾したのよ！」

したのよ、たのよ、よ、……見事なハウリング。

「……いや。それは、その」

「その？」

「……お前の価値をわかってくれる人が他にもいるんだなあ、って思ったら嬉しくなっちゃって、つい」

調子に乗ってしまったというか。

その結果が　どうしようもなく無様な負け、か。

言い訳のしようもないので、ごめん！　と真っ向勝負で土下座する。

「……」

「……」

しばらく、律の反応はなかった。顔を上げるわけにもいかず、ひ

たすら沈黙の痛さに耐えていると、

「……わたしに、そんな価値があるとは思えない」

不意に、ぼつりと声が漏れた。

「……え？」

恐る恐る顔を上げると　いつになく弱弱しい、ともすれば泣き出しそうな律の顔が、そこにあった。

「……わたしの体が、比較的恵まれているものであることはわかります。でも、裏を返せばわたしの価値はそれだけで　別に、あなたが体を張って守る意味があつたとは思えない」

「　律」

まるで、自分を物のように。

そこら辺に置いてある置時計ぐらいの物と同列に並べて評価し、律は困惑していた。

まるで　それが、当然であるように。

「……それとも、男子にとって女子の体はそれほど価値のあるものなの？　コレは、あなたが傷ついてても」

「　もういいよ」

思わず　彼女を、抱き締めていた。

「あ　」

伝わってくるのは、彼女の鼓動。

とくん、とくんと。規則的だけど、でも、確かに生の温かさを秘めた柔らかい音だ。

それだけで、もう充分。

「　お前が、自分をどう思ってるかなんて知らないけどな。俺は、俺なんかよりも、お前が一番大事だよ。それは体型とか顔とかの問題じゃない」

顔でも形でも声でも性格でもなく。

ただ　そうやって、物差しにしか、天秤にしかねないお前を。せめて俺が、守ってやりたいって、思ったんだ。

「　好きなんだ。お前が」

余計な言葉はいらない。

ただ、彼女を強く感じている今は。

「…………… 本当に、わからないよ。正義の言ってること。正義が考
えていること」

どう評価すればいいかわからない、と律は嘆く。

その考え方は、きっと変えられないんだろう。

なら、それでもいい。

どんな律だって、俺は受け止めてみせる。

「いいんだって」

「…………… ねえ。それじゃあ、さ」

不安げに肩を震わせて、律は小さく、呟く。

「おう？」

「あなたがいうことが本当なら。…………… もし、わたしが死んだら。もし、わたしの心がなくなつて、体だけになったら、」

ちやんと、わたしを捨ててくれるの？

ただの体には用はない、って。

「…………… ああ。それで、お前が救われるなら」

辻宮律は、確かに誰かにとって大切なもの ではなく、大切な

人だったんだ、と。

頷いて、くれるなら。

「…………… でも、死ぬとかいうなよ。次言ったら怒るからな」

「…………… ええ。ごめんなさい、正義」

俺たちは、しばらくそのまま。

お互いが生きていることを、ゆっくりと確かめ合った。

次の日。

辻宮律は、ただのモノになっていた。

第二章 †狂喜と呼ぶには純情な†（後書き）

ブロークン子大集合。

ちなみに、『世にも奇妙な或華さん』に出てきた神斜君と或華さんも登場してますけど、まあ、バックボーンは同じですけど、違う世界の住人だと思って下さい。平行世界、みたいな。

第三章 †剥ぎ取られた雛の殻†

第三章 †剥ぎ取られた雛の殻†

(or bloodshed)

6 . 孔谷透

翌日。

「んー、ねーむーい……」

「仕方ないだろ。律先輩直々に呼び出されたんだから」

休日の朝八時ごろ。俺とみつきは、部室を訪れていた。

「律先輩、いますか？」

軽くノックしたけれど、返事はない。少々の違和感を感じながらも、スペアキーで鍵を捻り、ドアを開けた。

回想。

『でもさ。クーヤの理想が高いのはわかったけど。仮にそんな子が現れたとして　クーヤは、その子を好きになれるのかな？』

翡翠は、尋ねるといふよりからかうような声色で聞く。

「……そりゃあ……なれるんじゃないか？」

まだ見たことはないからなんとも言えないけど。

『みつきちゃんは？』

「みつき？　……ああ、確かに」

他にはないものがあること。

受け入れる価値があること。

受け入れてくれる余地があること。

地球人であること。

人殺しではないこと。

確かに、彼女は　翡翠の、遠辺翡翠の双子の妹、遠辺みつきは、条件に一致する。

「……そうだな。あいつなら、好きになれるかもしれない」

『無理だよ』

即答だった。

「またかよ。……ああ、確かに俺は、他人に対して感情が湧かないかもしれない。お前に言わせれば興味もないのかもしれない。でもそれって誰だって多かれ少なかれそういうものだろ？　今は駄目でも、時間が経てば少しずつ気持ちってヤツが芽生えてくるさ」

多分。

『そうかもしれないけど……でも、いきなり愛情っていうのはハードルが高すぎない？　卵を割らずに中身を食べるのくらい難しいよ？』

……というか、不可能だろ、それ。

「……感情に、簡単も難しいもあるか」

『あるよー。人を恨んだり嫌いになるのは簡単だけど、人を好きになるのは結構難しいの』

理由がいるからね、と付け加えた翡翠の声は、彼女らしくない淡々とした抑揚のないものだった。

『でもまずクーヤは、他人に興味を覚えるコトから始めないとだね。そうだねー……誰かに何かスゴいコトをしてもらうとかどう？　なんだったらわたしが』

「遠慮しとく」

即答だった。

7・孔谷透

「ハ。確かに、凄いことだけど、さ……」

まさか、ここまでとは。

律先輩、気合入れすぎです。

「……………」

部室の中央。

辻宮律は モノになってもなお、天秤を保っていた。

昨日と寸分変わらぬ 否、一手進んだ局面の、将棋盤を前にして。

昨日と変わらぬ服装で、昨日と変わらぬ体勢で、昨日と変わらぬ凛然さを湛^{たた}えて しかし。

その腹には、不似合いな銀色のナイフが。

冗談のように。ノ冗談のようだ。

まるで、一繋^{モニユメント}がりの創造品。ノまるで、一夜限りの悪夢^{ナイトメア}。

彼女はそこにいて、ノ彼女はそこに亡い。

顔色さえ変えずに、ノ景色さえ眺めずに、

目を瞑っている。ノ死を綴っている。

「 律、せんぱい」

閉じたドアに寄り掛かって、平衡感覚を確かめる。

驚きはない。けれど、不可視の衝撃に身体を殴られたようだった。

「律っちゃん先輩！」

隣にいたみつきが、弾かれたように律先輩に 否、だったモノ

に駆け寄る。気づけば、彼女は小さな赤い池の真ん中にあった。

「くーや！ 保健室長さん呼んできて！」

みつきの叫び声が妙に遠く聞こえる。

だから、無理だって……。

ソレはもう、終わった後のモノだろう？

せめて せめて、静かにしておいてやれよ。

もう、そっとしておいて「早く……！」

乾いた張りのある音。

一呼吸遅れて、焼け付くような痛みにも、頬を叩かれたのだ、と気づいた。

見れば、みつきは瞳いっぱい涙を溜めて、体を震わせ、今にも崩れ落ちんばかりだった。

それでも、まだ。

辻宮律の生を、諦めていない顔だった。

「悪い。行ってくる」

「うん」

部屋を飛び出したのはいいけれど、保健室は別棟の一階だから、ここからだとは大分距離がある。校内での携帯電話の使用は禁止されていないけど、俺は持っていない。まあいざとなれば翡翠が、

「つて、そうか。翡翠、聞こえるか？」

『なーに？』

……やはり、聞こえていた。どうも、この校舎で 否、この学校で発生した全ての音は、彼女の聴覚から逃れられないようだった。あるいは、別棟の地下部室周辺なら大丈夫かもしれないけど……。

「……律先輩が、死……にかけてる。誰でもいいから、保健室関係の人を連れてきてくれ。あと、五十瀬先輩にも」

『死にかけてる？ 死んでる、の間違いじゃなくて？』

……やっぱりそうか。

彼女は、学校中に存在するあらゆる音を拾い集める。

ならば、律先輩の心音の有無など、手に取るようにわかるのだろ
う。

「……それでも一応、さ。頼むよ」

『うーん、いいけど……』

「後で時間作るよ。二人きりで」

『』

瞬殺だった。……現金なやつ。

戻ると、みつきは血だまりの中でうずくまっていた。腹部から下
が赤にまみれた律先輩は池から離れた床に寝かされていて、それだ
けなら、それだけを見れば、彼女はまだそこにいるようだった。

「……呼んだよ。そのうち来る」

「……っ、ひつく、ふぁっ、うううっ………！」

赤い水面に落ちる波紋が、弔いの雨。

胸を締め付けられる悲痛な泣き声が、鎮魂歌。レクイエム

震える彼女のぬくもりが　最後に感じた、人間の温かさ。

およそこの世界にある最上級の葬送式を以て、辻宮律の死没は受
理された。

「　　っは………」

不覚にも。

感情だなんて上等なモノ、とつくにおかしくなってしまうていた
筈の俺でさえも。

この光景には　羨望を感じずにはいらなかった。

なんて　なんて、うらやましい。

もし俺が律先輩で、みつきが来るまで意識を保っていたなら。
間違いなく、笑って逝けただろう。

間違いなく、安らかに逝けただろう。

……帰納法にしろ演繹法にしろ、人は必ず死ぬというのなら。

きつと、ヒトは死んでこそ己が人間であることを証明する。

その幕切れを、こんな形で迎えられるなんて。

「……ありがとうございます、律先輩」

どうか、そっちでもお元気で。

俺も、そのうちいきますから。

8・葉月茂花はつきもか

「……っ」

私がある場所に着いたとき、既に全ては終わっていました。

「……どうも」

「……っひっ、ひうつ、うつ……」

一人　じゃなくて二人の前には、胸の前で両手を組んだ少女の姿があつて。その顔は蒼白というよりも、あらゆる穢れが祓われた後のように、高潔に見えました。

「……失礼しますね」

イヤな臭い　何回経験しても慣れない　のする小さな池をよけて、少女の元へ。……腹部の傷の深度を見る限り、どうしようもなく手遅れだったけど、僅かな希望に縋って、呼吸、瞳孔、発熱、動脈を淡々と調べていきます。

でもやっぱり、少女は、もう。

「……………」

息を呑んで私を見守る二人に、少しためらってから、無言で首を振りました。

「……そう、ですか」

少女を運んでくれたんでしょうか、制服を血塗れにした男子の声　孔谷さんが、静かに呟いて、頭を下げました。もう一人の方は、みつきさんは何も言いませんでした。

「……ここからは、私の　私たちの管轄です。この子は、私たちが責任を持って保護します。……それで、いいですね？」

……言わなきゃいけないことですけど、目の前でたった今親友を　この世界では、何より大切なもの　失った彼女たちの気持ち　を思うと、胸が痛みます。

私は。こんな犠牲を出さないためにここにいる筈なのに。

またひとつ、何もできずに大切なものを失ってしまった　。
と、その時、

「律っ！！」

大きな音と共に、一人の男子が現れました。このオーバーコートと斑鳩さんに似た不良っぽい目つき、でも何故か存在感のない彼は　確か、彼女の恋人さん……名前は五十瀬さん、でしたっけ。

「おい、孔谷！ みつきでもいい！ 教えろ、何があった！！」

私を無視して、他の誰も目に入らないというように、五十瀬さんは物言わぬ少女を抱き締めました。でもその抱擁は一方的なものでしかなくて、少女は力なく首を傾げました。

それでも五十瀬さんは、少女に残っている魂をひとつ残らず慈しむように、しばらくそうしていました。……私に、二人の間を別つ権利があるわけもなく、彼がゆっくりと体を離すまで、目を伏せていました。

「……孔谷。後は頼む」

壊れ物を扱うよりも丁寧に、五十瀬さんは少女を床に横たえ、最後に額に軽く口付けすると、すぐ後ろでその一部始終を眺めていた呆然としているというよりは、観察していると表現した方がしっくりくる無感情の視線で 孔谷さんの肩を拳で軽く叩きました。

「先輩は？」

「当然 殺戮鬼に、復讐だ」

殺戮鬼？

それって、今巷を騒がせてる連続殺人犯のこと？

「ちょ、ちよつと待って下さい！ 事情は知りませんが、その、復讐なんて、そんな」「わかってますよ」

私の言葉を穏やかに遮って、五十瀬さんは自嘲気味に苦笑しました。

「……いや、実際はこれっぽっちもわかってないかもな。律との約束 開始一分で破るわけだし」

……そこにどんな葛藤と苦悩と逡巡があっただんでしょうか。

五十瀬さんは、せめて涙だけは流さないように、不自然なくらい目を細めて、笑顔でいようと努めながら。

「でも、無理みたいだ。例えばどんな姿形になっても、彼女がどう思っただとしても 五十瀬正義は、辻宮律を愛してる」

そう言ってから、五十瀬さんは場の沈黙にいたたまれないものを感じたのか、少し顔を赤らめて照れを隠すように頭を掻きました。

「……柄じゃないな、ったく。……死体は、見晴らしのいいところ
をお願いします。こいつ、高い所好きなんです」

「あ……は、はい」

「それじゃ」

五十瀬さんは軽く頭を下げて、早足で部屋を去りました。

「……相変わらず、身内を疑わないんですね……」

壁に寄りかかっていた孔谷さんが、ぽつりと呟きました。そ
の言葉を吟味して、私はようやくことの次第を少しだけ理解しまし
た。

少女 辻宮さんの死因は、多分ですけど、多量の出血によるも
の。

ナイフを腹部に刺したのが彼女自身か、それとも別の誰かかは指
紋鑑定をしてみないとなんとも言えないけど、少なくとも五十瀬さ
んは殺戮鬼さんの仕業だと思った。……そういうことなんですよ
か。

「じゃ、後はお願いします。俺は、みつきを休ませてくるんで」

「あ、はい。保健室なら、比奈ちゃんか初音さんがいると思います」
「どうも」

孔谷さんは、行くよみつき、と軽く声を掛けて、和室の中央で眠
る少女に一瞥も一礼もせず、演劇を見終えて満足して帰る客のよう
に、二人で退場しました。

9・遠辺みつき

鏡に映るわたしは、あかいあかい血に塗れて、寂しそうに笑って
いる。

出血は両目から。頬を伝う生々しい赤が、まるで血でできた涙み
たい。

もうすぐ光を失うだろう瞳が捉えるのは、もうひとりのわたし。
立ち竦むもうひとりのわたしは、何かを必死に叫んでいる。

「……………！……………で！……………んで！」

……なんて言ってるんだろう？ 耳を傾けてみると、少しだけ音が大きくなった。

「……なんで！ 俺は、俺はそれでも遠辺のこと」

「もう遅いよ。あなたにとってのわたしは、今ここで死んだんだから」

ああ、わかった。

これはそう、わたしが生まれた日の

「っ！」

滅茶苦茶に抗って、無理やり夢から逃げ出した。

「……あたま、痛い……」

この夢を見たときは、いつもこうだった。

覚えのない記憶、感触のない映像。

まるで、自分の中に知らない人が居座っているような気持ちの悪さに、律つちゃん先輩の綺麗な死に顔が重なって、地球がぐるぐる回って胃の中にあるものを吐き出しそうになる。

「大丈夫？ ひどい顔してる」

横からの声で、ようやくそこに人がいることに気づいた。

意志の強さを感じさせる切れ長の眉。凜とした双眸が、どっちが病人なのかわからないくらい心配そうにわたしを見つめている。ちよつと見たただけと肩に掛かるくらいの長さの短髪だけど、よく見ると腰の後ろから束ねられた髪がのぞいていて、相当の長髪であることが分かる。

「えっと……」

「あ、ごめんごめん。わたし、比奈。あけのはら ひな 朱野原比奈。保健委員じゃないけど、葉月先輩に頼まれてお留守番中なのです」

「へ、へー、そうなんだ」

すごく屈託のない笑顔で、比奈ちゃんは笑う。普段のわたしならすぐ仲良くなれそうだったけど、体調不良のせいかな、あんまり上手に調子が合わせられなかった。

「でも、まだ横になってた方がいいよ。なんかも……なんていうか、魂が半分抜けちゃっているみたいな顔してるもん」

「あ、ははは……」

……わたし、そんなひどい顔してるのかなあ。

魂が抜けてるみたい、かあ……。

「あ」

そこで、ようやく。

律っちゃん先輩の死を、直視した。

「……………あ、は、はははは……………」

そっか。

あのひとは、もう。

いつも厳しくて時々優しくかった、凛々しくて時々かわいかったあのひとは。

もう、この比奈ちゃんみたいに、笑うことができないんだ。

「……………ごめん。ちょっと、ひとりになりたいかな」

なるべく平気を装って、律っちゃん先輩にしかられないように、精一杯の笑顔を作った。

「……………うん。気分が悪くなったら、言ってね」

きつと見抜かれてるけど、比奈ちゃんは何も言わずに席を立ち、カーテンを閉めてひとりきりにしてくれた。

………そういえば、一人きりの寂しさを感じるのは久しぶりだ。

学校にいるときはいつもくーやが一緒だし、くーやがいないときは律っちゃん先輩やいつせー先輩が構ってくれた。だから孤独を感じることはなかったし、笑顔が絶えることもなかった。

でも、今はひとりぼっち。

ひとりはいやだ。ひとりになると、すぐに悲しくなって、泣きそうになる。わたしというカタチを保てなくなる。

「……くーやの、ばか」

わたしたちは、二人で一人なのに。仮にも病人を放っておいて、一体どこに行ってるんだか。

色んな感情がごちゃまぜになって、少しぼんやりしてきたから、涙をこぼさないように固く目を閉じて、布団を頭の上まですっかり被って、ひとまず考えるのを止めることにした。

……神様がいるなら。せめて今だけは優しくしてくれてもいいのに。

「犯人は誰だ？」

『殺戮鬼』

即答だった。

……別に、俺の人生が誰かによって書かれた一編の小説だなんて言うつもりはないけど、万が一推理小説か何かだとすれば、台無しだと思った。

「……でも、だとしたらおかしくないか？ 律先輩は女なのに」

『そう？』

殺戮鬼は男しか狙わない。

それはヤツがフェミニストという理由からだけではなく、単純に男の方が戦い甲斐がある人間が多いのと、

“『だってあの子、アルカちゃんにぞっこんだもん。初めての人は彼女がいいってさ。かーわーいいー』”

過去の翡翠の話によれば、確か、彼にはお目当ての女子がいるんだっただか。

「ところで、アルカさんについて、教えて欲しいんだけど」

かえらあるか
還界或華。

異端を狩ることで正常側であろうとする審判部に相對するように、異端を屠ることで異端中の異端であろうとする黙禱部の長。年は

確か、俺より年下。識別称号、《白いあくま》。由来は、日光あるいは月光を浴びて白銀に光る、ウェーブの掛かったボリユームのある銀髪から。ちなみに、あくまがひらがなののは、命名部部长曰く「……大人の事情」だとか。

「んー……いくらわたしでも、心の中までは聴けないしなー。書類上の情報以上が欲しいんなら、伊賀奇さんに聞いたほうがいいかも」
明らかな嘘だった。

意識しえない生理現象は、時として本人すら把握していない自己を浮き彫りにする。

要するに……話すのが面倒だ、ってことらしい。

この気分屋め。

「伊賀奇先輩、ねえ……」

あの、みつきがお気に入り偏屈オヤジ、か。

個人的には、進んで関わり合いになりたいタイプじゃないんだよね……。

裏表のある人間は、好きでも嫌いでもないけど、少し鬱陶しい。

「それにあの人、葉月先生と、……あー、うー、その、アレな関係だから、色々聞かせてくれると思うよ」

「……なるほど」

危うく忘れかけていたけれど　　律先輩の死因は、決して事故や自然死じゃない。

誰か、あるいは彼女自身が、俺の貴重な盟友を、いとも簡単に停止させた。

「……伊賀奇先輩は、いつものところ？」

「うん」

「わかった。それじゃ、」

「あ、待って！」

「？」

珍しく、翡翠が声を荒げた。

「……その前に、みつきちちゃんのお見舞い、して」

「……………」

ふむ。

『いいけど。……嫌いじゃなかったっけ?』

この双子姉妹、何故かお互いに近寄らないようにしている節がある。理由は両者の性質上という意味でわからなくもないけど、何か、他にも原因があるような気もする。

『キライだよ。大っキライ』

即答だった。

彼女らしくなく、最も彼女らしい、純正な悪意がそこにある。

『でも、クーヤにお見舞いしてほしいの。そうしないと……あの子
がここにいない意味がないから。だから、お願い』

「……………」

彼女はそれきり、何も言わなかった。

10・孔谷透

少し迷った結果、翡翠の忠告通り、保健室に行くことにした。果たして、みつきは額だけを出してすやすやと寝息を立てていた。

「……この分なら、大丈夫そうだな」

ゆっくりと立ち上がって、仕切り代わりのカーテンを閉めて、頭を切り換える。

「あ……もういいの?」

「うい。図太いやツで助かります」

やたら長い髪を一つに纏めた、ボーイッシュな感じの恐らく同年代の女の子が、声を掛けてきた。

俺が答えると、女の子は何故かパチクリと目を丸くし、しばらくフリーズしていたけど、やがてポン、と大げさに手を叩いて、神妙な顔つきに変わった。みつきと似て、感情表現が著しい子なのかもしれない。

「……図太くなんかないと思う」

「え？」

女の子は、なんととはなしに真っ直ぐ俺を見据える。

僅かに接近する、強い意志を感じさせる琥珀がかった二つの眼球。
まるで、心の奥底をのぞき込むように。

否。

まるで、自分の奥底をのぞかれることが怖くないように。

おいおいおい。

おいおいおいおいおい。

この子、本当に人間ですか？

「泣いてたよ」

異星人は、自分が不当な扱いを受けたように、怒っている。
怒っている。

ああ。なんて、人間らしい。

しかし、今気になるのは、それ以上に。

「みつきが？」

あの、みつきが？

たかだか 人間が一人、死んだくらいで？

「……悲しくないの？ キミは」

「なんで？」

思わず、語調が強くなっていた。

そんなの。

いつだってどこかで起こってる、当たり前前の日常だろうに。

「……目、閉じて」

「うん？」

言われた通り目を閉じ、一拍の間があって、

「 齒ア喰いしばれクソ外道がアあああああああッ！！」

轟音。

天井、蛍光灯が目の前に。ロケットのように頭が先端、回って回

って口から鼻血。

訳もわからず暗転する意識の底で、ぼんやりと思った。

すいません。ここ、保健室DEATHよね？

「……………はっ！」

目が覚めた。

ということはつまり、先程まで睡眠ないし意識を失っていたんだろっ。

「オ、オハヨウゴザイマス……………」

「お……………」

見覚えのある長い長い髪の女の子が、ぎこちなく話しかけてきた。……………はて。何か、彼女を見ていると激しく逃げ出したい衝動に駆られるんだけど。

「で、でもよかったー……………顔に傷とか残らなくて」

「顔に……………」

というか、そもそもなんで俺はベッドの上にいるんだ？

「なあ、聞きたいんだけど……………」

「ナ、ナンデスカ？」

「なんで俺の腕、動かないのかな？」

さっきから試しているんだけど、右腕が棒切れのように動きません。

「え」

女の子は、慌てて俺の右腕をつかむと軽く叩い「痛っ！　ちょ、本気痛^{マジ}いからっ」

おお、我ながら珍しく狼狽^{ろうたい}している。さすがの俺でも、生命の危機に瀕しているときぐらいは人間らしくなるものらしい。

「……………ごめんなさいっ！」

「謝るくらいなら叩かないでよ……………」

「そ、それもそうだけど、えーっと、つまり、……………」

顔を俯けて、彼女らしくもなく　　というほど知り合った仲じゃ

ないけど　口ごもる女の子（というか、まだ名前聞いてなかったな……）。

「ところで名前何？」

「ふえっ！？」

何か言おうとしていたのか、不意を突かれたらしく女の子は奇妙な声を上げて狼狽してから、火照る顔を冷ますように手をパタパタさせた。

「あ　そっか。そうだよな。改めてこんにちは、わたし、比奈。

朱野原比奈」

「ふーん。俺、孔谷透」

「うん。葉月先輩から聞してる」

「……………」

多分、みつき　伊賀奇先輩　葉月先生　朱野原のルートを辿ったんだろう。俺はそこまで有名人じゃないし。

って、そうだ。みつきの見舞いも済んだし、気は進まないけど、伊賀奇先輩に会って、事件に関する情報を集めないと。

せっかくの一大事件だしな。

僅かに芽生えた興奮が褪^あせない内に、情報を集めないと。

「介抱ありがとな。俺、もう行くわ」

「え？　ちょ、ちょっとちょっと……………」

清潔なベッドのすぐ横に綺麗に並べられていた上履きを履いて、左腕に力を込めて立ち上がる。……よし。片腕だけでも、右腕はス Tangan を浴びているような激痛が走るくらいで、それほど支障はないな。そういうえば、大分昔に素手でガラス割ったときの傷は、まだ跡は残っているものの、一応塞がってるみたいだった。まあ、そんなもんだよな。

「待っててば！　せめて固定しないと悪化しちゃうよ！」

「…………別に、」

「いいから座る！」

いささか乱暴に両肩を抑えられて、しぶしぶ回転式の椅子に座る。

衝撃が右肩から腕まで伝わってきて、軽くブラックアウト寸前だった。

「……確かに悪化するな」

このままもめてると。

「まあ……他人だけじゃなくて、自分にも興味ないんだね、キミ」

朱野原は、手際よく右腕を吊ってくれる。意味もなく、将来はいお嫁さんになりそうだ、と思った。もっとも、この世界に外の法律や道徳なんてものは干渉し得ないので、将来と言わず今この場で結婚を申し込む手もある。でもまあ、……律先輩と比べると、スタイルがなあ。

「……何？」

怪しい視線に気づいたのか、不思議そうに眉を潜める朱野原。どうしてなかなか、カンも鋭いらしい。

「いやいやいや。むしろ逆」

身の危険を感じて、話を戻すことにした。

「逆？」

感情はないけど、興味はありなんですよ。

「例えば、そうだな……朱野原に彼氏がいるかとか、すごい気になる」

「カ い、いないよ、そんな人……（ボソボソ）伊賀奇先輩には、葉月先輩がいるし……」

「じゃ、付き合わない？」

「付き？」

包帯を巻く手を止めて、三秒ほど言葉の意味を頭の中で消化しているように硬直してから頷いて、

「ごめんなさい。わたし、好きな人がいるから」

朱野原比奈は。

俺の適当極まりない告白に、真剣を以って答えた。

「バツサリ」

空いた左手で額を押さえ、天井を仰ぐ。

なんてこった。

マジ、好きになりそう。

「……はい。できたよ」

「さんきゅー」

処置の終わりを宣言したものの、朱野原は、恥ずかしさが残っているのか、目を合わせてくれない。仕方ないので下から覗き込んでみたものの、右から見れば左に、左から見れば右に顔を逸らされてしまい、ひどく楽しかった。

おお。楽しいなんて言葉が、上っ面だけでもこんなに自然に出るとは。

やっぱり、惜しいなあ……。

「どうしてもダメ？」

「……うん。ダメ」

「土下座しても？」

「うん……」

「結婚からでいいから」

「ハードル上がってるよ……」

「じゃ、友達から」

「それなら……うん、いいよ」

「よろしく、比奈」

「ひ ひな？」

「友達なんだし、呼び捨てくらいは」

「……そうだね。よろしく、透」

「わお」

素敵な笑顔だった。

俺の強引な誘いに一向に気分を害した風もなく。

新しい友達ができたことへの喜びと、少々の照れを絶妙に混じり合わせて。

俺には一生涯現出来そうにない、素敵な笑顔だった。

「保健室、レベル高いよな……」

元祖大和撫子な葉月先生といい、猫タナースな初音ちゃんといい、新発見、人間値測定不能な比奈といい。

みつきのお見舞い、ある意味大正解だったな。不謹慎だけど。

「後で識別称号聞いとかないと……」

彼女をより深く理解するために、あの囲いたがり羊飼いに。

それはさておき、現在地、新聞部室前。

部屋の主は、識別称号《道化》^{クラウン}、あるいは《詭弁王》^{フェイクオウル}。

命名部長の語彙力を以ってしても、一語では捉え切れなかった異色人間。

「すいませーん。伊賀奇先輩、いらつしやいますー？」

長短強弱を付けた何度かのノック。

意味もなく、モールス信号でSOSを発信。

「へえ、君にしてはなかなかウィットに富んだ挨拶じゃあないか。

いいよ、入りたまえ」

「……どうも」

やっぱり、衰えることなく、最速思考の持ち主だった。

相変わらず面白い声帯だね、というよくわからない歓迎の言葉を無視して、俺は事件のあらましを伊賀奇先輩に話した。

「で？ 何から聞きたい？」

「じゃ、まずは犯人から」

この人相手に駆け引きは不可能。何を聞きたいか、ではなく、何から聞きたいか、と尋ねる彼は、間違いなく俺の質問を全て先読みしている。あるいはそう思わせることが彼の手なのかもしれないけど、生憎俺はその手の心理戦は面倒だから、開始一秒で白旗を揚げた。

果たして、伊賀奇先輩はあからさまに失望した風に悲しそうな顔になった。

「おやおや……つれないね。久しぶりに《会話》ができと思った

のに」

そりゃあ、あなたにとっちゃ普段の会話なんて予定調和に過ぎないんでしょうけど。

そんな退屈な能力。こっちは、羨ましくともなんともないんですよ。

「……何か言いたそうな顔をしているね」

「別に。ただ、世の中ギブアンドテイクですよね」

「へえ？　じゃあ、僕が情報を提供してあげる代わりに、君は僕に等価分の何かをくれるっていうのかい？」

「《猫屋》のクレープ爆弾を二つ。バルサミコス味で」

「OK。なんなりと聞いてくれたまえ」

効果は抜群だった。ちなみに《猫屋》は頭に二匹の白猫と黒猫を載せて調理を行うという、衛生上とても問題ありげなクレープ屋だ。付け加えるならば、あの店の商品は主に食用ではなく戦闘（投擲）用に使われることが普通で、あの斬新かつ新鮮な味に自我を崩壊されずにいられるのは、世界広しと言えど無類の甘味好きなのこの人くらい。あるいは調理者本人だけだろう。もっとも、あの味を甘いと評するには相当な覚悟とライフポイントを必要とするだろうけど。

「しかし、犯人、犯人ねえ……初手としては無粋極まりない質問だと思わないかい？　初手で地球は丸い説を使つて玉で王を取るくらい無粋だよ」

「例えばコアっていうかマニアックですね……いいじゃないですか、お互いの合意があれば」

「まあいいんだけどね……ここでアッサリ解答を出してしまうと僕の出番がなくなってしまうから、茂花君がくれた簡単な情報から説明しよう」

チツ……………長くなりそうだな。

「何か言ったかい？」

「いえ別に？」

「ふうん」
ぬうん。

伊賀奇先輩の婉曲かつ抽象的な説明を要約すると、以下の通り。
律先輩の死亡推定時刻は、俺とみつきが死体を発見したのと同じ日の午前7時頃。死因はナイフに刺された部位からの出血多量。俺たちが現場を去った後、さすがは元新聞部副部長の葉月先生、唯一の出入り口であるドアを始め、外部とあの部屋とを繋ぐ全ての怪しい箇所をチェックしたそうだが、ドア以外は完全に施錠されていたらしい。俺は、スペアキーを使って鍵を開けて入室した訳だから、つまり

「密室殺人事件、ですか」
「分類するならね」

全く……このご時世にしては、オーソドックス過ぎる響きだ。

午前七時とは、生徒が学校に入れるようになる時間だ。時間に厳格な律先輩は恐らく一番にあの部屋を訪れ

「君の 正確には翡翠君の通報を受けて茂花君が到着したのが八時半。つまり犯人は、君たちが部室を訪れるさらに前に部室に踏み入り、辻宮律を殺害した。そういうことだと思ukai?」

「ですかね……」
含みのある問いに、適当に相槌を打った。

「というか個人的には、そんなチャチな密室よりも現場に置いてあった将棋の方が気になるんだけどね。君、再現できるかい?」

「はあ……できますけど」

そんなことよりって、律先輩じゃないんだから……。

俺の複雑な心境をよそに、そりゃ結構、と伊賀奇先輩は上機嫌そうに机の中から初期配置に並べられたマグネット将棋を取り出し、俺に渡した。

「……用意いいですね」
「何、どちらにせよ一局ご指導願うつもりだったし、ね」

先輩の方が強いですけどね……。

「えーっと、ここがこうなつて、この角が成つてて……」

記憶を掘り起こし、律先輩最後の対局、その圧勝図を再現する。

「おや、初手からは並べてくれないのかい？」

「最初から見てたわけじゃないんで」

やがて、局面は接戦　どころか一方的な侵略による略奪を繰り返して終盤戦へ。五十瀬先輩の陣は完全に崩壊し、対する律先輩の陣は傷一つ……否、たった一つの歩に入り込まれているけれど、それ以外は理想形の布陣だ。

「へえ……これはまた、なかなか楽しい展開じゃあないか。次はこつちの、瀕死君側の番だろう？」

「はい」

さすが　一目でわかるか。

「律先輩が死んだ前の日の時点での彼女と五十瀬先輩との対局は、ここまでです。で、当日は一手だけ進んでました」

「ふうん」

造作もなく、白磁のような繊細で長細い指が孤立する歩を掴み、パチリ、と一歩進んで歩と成った。

その手こそが。この圧倒的な劣勢を覆す、唯一無二の鬼手だった。

「　正解です。さすがですな」

「そりゃ、これしかないからな」

攻めつ気のある指し手なら誰でもわかる、と当然のように伊賀奇先輩。そういうえば……五十瀬先輩だって弱くないのに、こんなにも一方的に負けているのは、あるいは、律先輩との対局を長く楽しみたいという気持ちの表れだったのかもしれない。

でも彼女はもういない。

彼女は、辻宮律は、二度とこちらに干渉できないどこかへと昇華された。

「また一人、惜しい指し手を失ったね」

彼女の死ではなく、自分の楽しみが減ったことをのみ嘆く伊賀奇先輩。

「そうですね」

適当に相槌を打って、薄暗い部室の奥を注視する。さっき気が付いたんだけど 先輩の後方に、何かがいるような気配がする、よ
うな……？

「ところで孔谷君、君はこれからどうするつもりなのかな？」

「……答えてくれそうにないので、自力で收拾をつけます。差し当たっては」

殺戮鬼VS正義の味方、その顛末を見届けないと。

「助ける気はないんだろう？」

「それが何か？」

鋭い指摘だった。声に出してもいないのに、的確にこちらの思惑を読んでくる。

しかしまあ、その通り。

どちらが勝つかに興味はあるものの……その結果、どちらかがどうになってしまうことについて、感想はない。

「いや、別に。ただこのままじゃあ、ちよつと戦力差がありすぎるんじゃないか、と思つてさ」

それは確かに。

前回の勝負は、先の将棋同様、試合とさえ呼べないお粗末なものだった。

しかも今回の土俵は殺し合い。どれだけ怒りに我を忘れたところで、あの人を嫌いになれない正義の味方に、人は殺せない。

否。既に死んだモノでさえ、殺せやしない。

だからこそ、その突出した優しさが、彼をここに呼んだんだから。とは言っても、俺や伊賀奇先輩が手伝っても役に立たないんじゃない？

むしろ邪魔？

「いや、君がピンチになったらみつき いや、今は翡翠君だった

つけ？彼女が助けてくれるからね。それはそれでアリじゃないかい？」

「そんなことしたら、学園崩壊レベルの争いになっちゃいますって」
嘘か真か、翡翠の後ろには生徒会執行部の誰かの影がちらほらあるとかないとか。

まあもつとも、もう崩壊してる感はないけど。

「そこで、だ。切り札として、彼女を貸してあげよう」

すい、という動作したかわからない洗練された流れで、伊賀奇先輩は席を立つ。

その後ろには。

「……………にゃあ」

見覚えのある、装飾に乏しい漆黒の聖服。

どうして今までこんな輝きに気づかなかったのか　限りなく銀色に近い白髪は、光一筋と差さないこの場所にあってもなお、静謐な光沢を帯びて。

腰を浮かせた正座のような姿勢で床に座り込み、恨めしげにこちらを上目遣いに見上げる三白眼は、強い意志を秘めた猫じみた黄金色。

かえら　あるか
還界或華。

識別称号《白いあくま》。朽木先輩の後を継いで黙禱部長を担う強者。

そこまでは、俺の情報と一致する。

ただ、特筆すべきは。

ただ、注目すべきは。

「…………え、そういう趣味？」

「あつはっは。いや、どちらかといえば僕の趣味さ」

そのポリリウムのある髪の上に、不似合いな　否、異常なほどしつくりくる謎アイテムが。

「茶色か黒か迷ったけれど。やっぱり、或華君は白と黒だよね」
黒を基調とした、三角のカマボコを二つ付けたカチューシャ
まあ、俗にいう猫耳が、しっかりと載せられていた。

.....。
.....。
.....。
いや、アリだけどさ。

うん。

OK。

「ええと.....」

いまいち事態がつかめないので、伊賀奇先輩に視線で助けを求める。

「仔細の説明は面倒だから割愛するけれど、彼女にはいくつか借りがあつてね。そうだな 君の中で事件が解決するまで、彼女を好きに使つていいよ。少年誌に掲載できる範囲なら」

「な ちょ、ちよつと待ちなさいっ！」

反論の声を上げたのは、件の還界くだん（確か同年代だったので呼び捨てることにする）。やってられないとばかりに猫耳に手をかけ、

「三十三対十七」

伊賀奇先輩が、何かの結果を呟いた。

「私を存分に行使しなさい、孔谷。最大限の結果で応えてあげるわ」

見事な豹変だった。

..... まあ、何はともあれ頼もしい援軍を得た。機械装甲＋ロケットパンチ装備の熊を素手で倒せる彼女なら、あの殺戮鬼相手でも引けを取らないに違いない。

「えーつと、還界？」

「或華さんでいいわ。呼び捨てされるの、嫌いなものよ」

「..... 或華さん？」

「何？」

妥協しているような軽視されているような、微妙な譲歩だった。

面倒なので、内心ではそのまま還界で通すことにする。

「じゃ、行こうか。神斜がどこにいるかわかる？」

「ええ。大方の予想はつくわ」

「そりゃ結構。それじゃ先輩、不幸があればまた」

「最後に一つ」

とても自然な呼び止めで、危うく部屋を去りかけた。

「何ですか？」

振り返った先、いつの間に用意したのか、最初から置かれていたのか、冷めたココアをひとすりした伊賀奇先輩は、俺のほうを見ようともせずに、

「月まで行けば、君の身の丈は変わるのかい？」

五十瀬先輩が逆転しかけた局面に、とどめを指す至高の一手を放ち。

なんでもないことのように、誰かに対して呟いた。

即座に翡翠のところへ向かいたところだったけど、雨が降ってきたので遠足は中止になった。理由は簡単、雨の日の彼女はひどく機嫌が悪いからだ。しかし恐らく神斜は近いうちに彼女に接触するだろうから、少なくとも明日の午後までは捕まらないように、そして、少なくとも明日の午後までは、神斜と五十瀬先輩が衝突しないよう情報を操作してくれるよう翡翠に頼んで、みつきを連れて学校を後にした。

理由は簡単。

俺が、そんな面白そうな事態の顛末を、見届けられないから。

天をうつすらと覆う切れ目のない雲から、断続的にこぼれ落ちる透明色。

ぱたぱたと乾いた地面を潤す音の連なりに、しかし俺はなんの感慨も湧かず、みつきにとってはこれは音楽だ。

「いい天気だね」

雨だけど、とみつきは笑む。彼女にとって悪い天気とは雷鳴の聞こえる天気のこと、俺にとっていい天気とは心が動かされそうになるほど極端な天気を指す。

「そうだね」

ズレているといえば 普遍の塊であるみつきでさえも、だからこそ、ズレているのだろう。

あれだけ泣いていたみつきは、今はもうすっかり立ち直っているように見える。でも恐らく、まだ律先輩の死を引きずっているだろう。一般人が肉親を失ったくらいには、喪失感に囚われているに違いない。他人を心から家族同然に思えるその姿もまた、最も人間なみつきらしいものだった。

ともあれ。

一つの傘に寄り添う俺たちは、二人で一人。これまでは、俺が一方的に付きまとっているだけで、みつきは一人でも生きていける。

そう思っていたけど。今日のことから 主に比奈の発言から

考えるに、案外、彼女はもうい存在なのだ、と知った。

車の通ることの方が珍しい横断歩道で、俺たちは意味もなく信号待ちする。みつきは目を瞑り、俺にとっては雑音でしかない雨音に耳を澄ましている。寒さにかじかんだ唇が奏でるリズムは、滑らかに空に舞い上がり、誰かの耳元に届くだろう。

注意して聴いていなければ掻き消されてしまうほどの細かい旋律に耳を傾けながら、濡れて光沢を帯びたアスファルトに生まれた水たまりを見つめる。

想起するのは、律先輩だったモノが作った生の沼、あるいは死の池。

その中に沈んでも尚、終点に埋没しても尚、彼女に一点の穢れもなく。

だとしても、彼女さえ完璧な人間にはほど遠い。

高潔ではあつたけど。

「……俺が言える立場じゃないけどさ」

人間の域にさえ達していない俺には。

あるいは、人間という枠組みから逸脱してしまった俺にはと。

「あ……猫」

信号はまだ赤だったけれど、みつきは不意に走り出す。彼女が向かった先に目を凝らすと、狭い路地の間に一匹の猫が倒れていた。降り注ぐ雨は、当然のように彼女を避ける。

みつきは、泥にまみれて動かない迷い猫を、ためらいもなく胸に抱いた。

「……………」

外から迷い込んだ、というのはありえない。恐らく、《猫屋》飲食物を取り扱う店でありながら猫のたまり場と化している、衛生環境が気になるクレープ屋の一匹だろう。あの店が儲かっているかは微妙だし、食べ残しのゴミを漁るうにも絶対的に人口が少ないこの世界では難しかったんだろう。

路地裏でひっそりと生涯を終えた薄汚い猫。否、だったモノ。

それは、一度世界から拒絶された俺たちの未来に似て。

だからこそ俺は、みつきと同じようにその猫を見て、やはり何一つ、感じなかった。

「……ごめんね」

誰に向けた謝罪か、みつきはそう呟くと、猫の死骸を雨の当たらない場所にそっと横たえ、最後に頭を撫でた。

その背中には、潰えた生に対する未練も憐憫も羨望もなく。

ただ、全てを許容するような、包み込むような、慈愛と呼ぶには人間すぎる優しさがあった。

願わくば 俺が最後に見る光景に、このみつきの赦しゆるがあればいい。

柄にもなくそんな感傷に浸るような気分を偽装し、晴れることのない空と向き合い、苦笑を作った。

第四章 †幕間†

第四章 †幕間†

(Curtain Call)

11 . 神斜大地

昔、オレは間違いを犯した。

大切なものを、世界の他の何よりも大事にしていた宝物箱を、大事にするあまり、抱き締めた腕で押し潰した。

“……ねえ、大地？ それでも、わたし”

そのとき、思っただ。

オレは 壊し方を間違えた、と。

「……ケツ」

今日もよく殺した。ただ、最近はスキルアップし過ぎたせいか痛みを感じる前に絶命^イつちまう輩が多いので、出血多量やショックで死なない優しい肉の千切り方を目下研究中。

「チィ……あんのアマ、卑怯なマネしやがって……」

それはさておき。現在地は時計塔の根元、鈍色の長い長い螺旋階段、その始点。てっぺんに住んでる奴が開けっ放しにしたせいで吹き込んできた風やら雨の被害を被ったせいだろう、一歩足を踏み出すと、ギシ、と耳障りな音を立てた。

「ナルホド……侵入者対策も兼ねてるってワケか」

いくらアイツが他に類を見ないレベルで地獄耳でも、完全無欠というワケにはいかない。彼女自身が寝ていたり他の作業に没頭して

いる間だけは、束の間とはいえ学園のプライバシーは守られている。
「盗み聞きとか、趣味悪いにも程があるっつーの……」

まあ、人のコトは言えないだろ、とか突っ込まれそうだが。人殺しだし。

で、そろそろ本題。

先日はよくもオレの邪魔をしてくれやがったクソ女をとつちめてやろうと思ってやってきたんだが、そこは三日三晩杯を酌み交わした仲、相手もお見通しのようで、守備兵を用意していた。お陰で、気乗りのしない殺しを大量にさせられる羽目になって、『一日と半分待つてくれたら入ってきていいよ』とか言われて、そうするとオレとしても無闇な殺生は手が疲れる訳で、正直な所焦らしに焦らされたオレの憤りはメーターを振り切ってリミットブレイク寸前だった。んでもって次の日の午後、宣言通り時計塔付近に人影はなく、死体の山は清掃部が処理したらしく綺麗なもので あの部分、部費がやたら高いのはきつと心のアフターケア費なんだろうな、と思った。ドンマイ、恨むならオレと同時期に生まれたことを恨め これをひたすら上るだけ、だと思っていたんだが。

「最後の最後だけ女を用意するたあ、アイツが考えそうなギャグだな。いい趣味してるぜ、つたくよ」

規則的に鳴り響くやかましい轟音と共に、遙か頭上から、ボロくなった階段を片っ端から踏み抜いて疾駆する一つの影。一足ごとに建物全体を揺らすような重量感は、どうあがいても人外の領域だった。

「ま、実際人じゃえねえしな」

こちらとしても、エリスやら比奈やら、直接戦闘型の女子が相手でないだけありがたいし、文句は保留してやろう。要は殴る相手が女でないのなら、弱者だろうが強者だろうが、男だろうが獣だろうが関係ない。

本番前の時間潰しなど 誰で代用しようと、大差ない。

「さて。挨拶は必要なさそうだな」

駆け下りてくる標的は、勢いを緩めることなく咆哮した。このまま体当たりをかまそうというハラらしい。遠目にもわかる鋭利な爪が、意味もなく壁を挟り取る。戦闘意欲は充分、つつーことか。

その正体は、体長二メートルは優に超える巨大な熊。某ボクシング漫画に熊は下りが遅いと書いてあったクセに、あの速度。もしかすると、上りもつと速いのかもしれない。

そこまで直径のない円をぐるぐると描き続ける大熊、それだけならただの異常な光景だが、更に目を引くのは、それに平然と騎手よろしく跨る女子の存在だった。

瞳を前髪で隠した、短めの金髪のツインテール。オレの眼力を使うまでもなく、つるつぺたんであることがわかる各部。彼女の年には小さな体躯 乗っている獲物がビッグサイズなせいで、彼女の小ささが殊更際立つ。オレの眼力を使うまでもなく、つるつぺたんであることがわかる各部。

所属は共生部長、名は森守深澄。もりもり みすみ 識別称号は確か、《人間嫌い（アンチ・ヒューマン）》。

……ん？ 何か、まとめた情報に重複があったような。まあいいか。

「よーお。そいつ何号？」

騒音に負けないように、大声で聞いた。相手は声では返さず、熊の背中に当てていた手を片方離し、指を四本立てた。オレクラスの動体視力がないと判別できない、受け手を選ぶ対応だった。

「あーそっういや、三号改は或華が倒したんだっけか。そりゃあ……」
負けられねえな。

しかし今回は、大きさ以外は見た感じ普通の熊なんだが、どんな仕掛けを施しやがったんだか。

「ま、いいや。行くぜ、熊」

もはや何段飛ばしだかわからない勢いで迫りつつある大熊に対し、距離を取るのではなく、逆に縮めていく。

「……！」

馬上、ではなく熊上の深澄が、小さく驚く雰囲気があった。構わず速度を上げ、一撃に込める力を溜めていく。

常識的に考えれば、オレの敗北は明らかだろう。上と下という位置的不利、人間と熊という体格的不利、始動した時間差による速度的不利。ナルホド、翡翠がお膳立てしたに相応しい、よくできた作戦だ。真っ向から挑まれれば迎え撃たずにはいられない、オレの性質を熟知している。

だが 翡翠。

「お前の唯一のミスは 本体を、女自身にしなかったことだ」
刹那、熊が視界に姿を現す。こんな直径の短い螺旋階段での遭遇だ、会った、と思った瞬間にはもう衝突している。

故に 勝負は、一瞬で決着した。

オレの喉笛を噛み砕かんと開かれる凶悪なアギト、心臓を切り裂かんと振られる一撃が致命傷の右手、どちらをかわせなくてもアウト、だがそもそもこの状況で回避する術など皆無。

だからオレは更に踏み込み、躊躇なく、敵の大口に腕を突っ込んだ。

肉の抉れる小気味よい音、右腕の筋肉という筋肉、神経という神経がズタズタに破壊される嫌な感覚。

だがその代償として、大熊の後頭部から、使い物にならなくなった手首から上が生え出していた。

一呼吸遅れて、放射線状に散布される二匹の獣の血潮を混ぜ合わせた赤い雨。やがて、数秒の痙攣を経て、大熊の鼓動は停止した。

ついで、ロケットのように飛び出しそうになった深澄の制服のりポンを空いた左手で掴み、捕獲する。

「……こんなもんか。ったく、死んでも離さないったあ、いい根性してるぜ、コイツ」

右手に食い込んだ牙は、どうあがいても抜けそうになかった。仕方がないので、絶命した大熊の首をへし折り、てこの原理でねじ切った。うむ、我ながら無粋極まりない。

「修行足んねえな……」

こんなんじゃ、本番で絶対失敗する。

アイツと殺るときは、アイツを殺るときは、もっと上手く仕留めなければ、台無しだ。

なるべき綺麗なカタチのまま　一番美しい部分だけを、永遠に奪い取る。

「そっぴや、怪我ないか？」

オレの腕に抱かれた深澄は、制服の所々が破れている以外は今回の戦いのせいだけじゃなく、日ごろから苦労してるんだろう問題なさそうだったが、一応聞く。

「……ん、大丈夫。ゴムが外れたくらい」

ぽつり、と呟くようなか細い返答。これが彼女独特の喋り方だが、大事な実験動物……もとい《お友達》を殺された割に、シヨックは少ない様子だった。

「って、マジか！　待つてろ、今すぐ直してやる！」

見れば、彼女のアイディンティティであるツインテールの片翼がばらけていた。これはこれでいいという輩もいるだろうが、オレから言わせれば素人以外の何者でもない発言だ。わかつとらん。

ポケットから取り出した大小意匠材質彩色多種多様の髪をまとめるゴム（常備）の中から、彼女に似合うものを素早く選定し、無事な左手と口を使ってさくつと結んでやる。

「……あ、ありがと」

「気にすんな。男として当然のことだ」

存在意義を取り戻した深澄の頭をくしゃくしゃになでてから、天を仰ぐ。残りは、段数にして後五十ちよいといったところ。それくらいなら、腕の痛みも気にならないだろう。

少し名残惜しかったが、リボンを引っ張って捕獲したときのせいで、胸元が開き気味になっているグッジョブな眺めを隠そうとしない深澄を置いて（恥ずかしくないのか、と聞いたなら、「あなたは、虫ケラの視線に、恥らうの？」とか言われそうだ）、上へと歩を進

める。

そこで 違和感を、感じた。

発信源は遙か下方。螺旋階段を降り切って、さらに二階ほど下だろうか。さすがのオレでも、人間の気配を読み取れる距離はあの地獄耳女には敵わないが、特定の人物に関しては話は別だ。

還界或華。

オレが恋焦おっわくがれる横惑の少女であり、

オレが一般的に見れば破綻したモノになった、その始点であり、オレが最初に瓦解させるべき唯一の存在。

彼女の最大の特性はひとえに、極端に孤独を忌避する習性であり、その手段として実体としての自分ではなく、記録としての自分を外界に広めることを選んでいる点にある。それは実感の持てない充足であり、実際に交わった結果として残る副産物みたいなものだ才レなんかは思っんだが、彼女にとってはどうやら質より量の方が大事らしかった。あるいは、彼女と正面から相対できる人間の少なさが、彼女をそうさせたのかもしれない。

しかし、まさかお前。

ここに来るつもりじゃ、ねえよな？

「……でも、本当に拍子抜け。こんなに弱いなんて」

自戒するように呟く深澄。予想以上にオレが強かったとは言ってくれない。まあ、人間なんて醜悪な生物。これはあくまで深澄の考えであるが、彼女の言に迎合するなら、オレにとって人間とは男のみを指す言語となる。を褒めるのは抵抗があるんだろうな。うい奴め。

そんなことを考えながら、下の気配が気掛かりではあったが、女を無視するのはオレの存在意義に関わるので、声だけで適当に（アウトではなくベター）相槌を打つ。

「まあな。正直、もちつと齒ごたえがあると。ざくり。」

「こんな簡単に引つかかるなんて、思ってたなかった」

今更ながら、振り向けば。
首から上を喪失した大熊が、俺の背中を切り裂いていた。

12・伊賀奇創兵

いつか無に帰る全てのものに意味がないとすれば、この世における全ての事象には意味がなく、喜怒哀楽にも栄枯盛衰にも森羅万象にも有象無象にも魑魅魍魎にも意味がない。

ただ、ここで肝心なのは。

意味がないとする判断そのものにも、また等しく意味がないという事実。

「なんてね」

どうでもよい言葉遊びだった。仮にこの世が既に手詰まりだとしても、あらゆる行動の価値が同じならば、自分の気が向くままに好きにやればいいだけの話であって、なんら問題なかった。

しかして、こんな一度結論を出した無駄な思考で時間を潰すような真似をしているのは　どうにも僕は、そろそろ訪れるであろう人物の登場を、思ったよりも心待ちにしているようだった。

そして、見計らったように、

「……創兵さん。いらっしやいますか？」

部室の外から、控えめに呼び掛ける声がした。軽く応じると、ややあつてゆつくりとドアが開かれた。

「やあ、茂花君。三日と十二時間と四十五分と十秒ぶりだね」

「そんなに細かくは覚えてませんけど……はい、久しぶりですね、創兵さん」

ふわり、と大輪の花が一つ咲くように、穏やかに笑う茂花君。しかし、今回の笑顔は今一つ精彩を欠いていた。

「ふむ。どうも、お疲れみたいだね」

その辺の椅子を引っ張り出して、僕に向かい合う形で置いて座ら

せる。ちなみに服装は、いつものように白衣ではなく、夏の太陽によく映えるであろう白いワンピースだったけれど、こんな薄汚いところではむしろ不自然なものですらあった。

「あ、ありがとうございます」

「それで？ 律君の事件について、何か進展はあったのかい？」

積もる話はあるのだけれど、茂花君の体調を慮^{おもんば}つてすぐに本題を切り出した。途端、少し疲れ気味だった彼女の瞳が、たちまち覇気を取り戻す。この、仕事モードに入ったときの彼女の強い意志を感じさせる丸く大きなとび色の瞳が、僕のお気に入りの一つだった。

「はい。茅さんと光さんに協力してもらって調べたんですけど、やっぱりあの現場はいわゆる密室状態でした。鍵に糸を引っ掛けたり氷を使ってみたり、ありそうなトリックの痕跡も注意して調べたんですけど、特には見つかりませんでした」

「はっはっは。そりゃいいね」

自分たちに観測できないから存在しないだろう、だなんて。的外れな努力もいいところだ。現実問題、こんなに限定された世界の中でも僕の両手じゃ抱え切れないくらい世界は広く、たとえば説明されても理解すらできない事象なんて、数え切れないくらいあるに違いないのに。

つまるところ。

考えるべきは、トリックではなく、その動機。

「その和室、だったっけ？ 鍵は誰が管理してたんだい？」

「二つあったんですけど、一つは辻宮さん、もう一つは孔谷さんとみつきさんと五十瀬さんが交代で使っていたそうです。あの日は、孔谷さんが」

「ふうん。律君の死体は、鍵を持っていたってことかい？」

「……はい。手の中に握りこんでたみたいです。少なくとも、死後硬直する前に」

「あ、そうそう。それなんだけれど、死体は正座していたって聞いたけれど、それは死後にそういう姿勢にさせられたってことかい？」

「えーっと、私も最初はそう思ってたんですけど、違うみたいです。特に血痕が飛び散った様子もないですし……不思議なんですけど、ナイフをお腹に刺されたあと、辻宮さんは、その姿勢を保ったまま、出血多量でお亡くなりになられたみたいなんです……」

「そりゃあ、また」

なんていうか……そう、健気な話だね。

普通なら、もがくなり腹を押さえるなりナイフを抜こうとするなり、事態を改善しようと試みるところだろうに。

そんなにも 五十瀬君のことが、好きだったのかい？

自分の静止よりも、優先順位が上だったのかい？

「……創兵さん？ 何かわかったんですか？」

首を傾げてこちらを見上げてくる茂花君。さすがに十年來の付き合いだった。

「いや そうだね。茂花君は、誰かを自分のものにするっていうのはどういうことだと思う？」

「え？ え あ、あ、あの、それってどういう……？」

何を勘違いしたのか、顔を真っ赤にして俯く茂花君。いくつになっても、この辺の愛らしさは健在だった。

「どうって、言葉通りの意味だけけど」

「じ、事件に関係あることなんですか……？」

「あながち、関係がなくななくなってもない」

「え、えーっと……？」

しばらく指を折って表が裏か考えていた茂花君は、しかしやがて面倒になったのかため息をつく、心を落ち着けるように深呼吸してから、ゆっくりと答えた。

「うーん……その人が、一日中私のことしか考えられないくらい私のことを好きにならせる、とかですか？」

「ふむ」

茂花君らしい答えだった。

僕なんかだと あらゆる一挙一動を僕の許可なしには行えない

ようにすること、とか答えるところなんだけれど。

「じゃあ、その方法として対象の殺害は含まれると思うかい？」

愛するが故に、占領するために、その人間を殺す。

「 ないです。絶対」

考えるまでもない、とばかりの即答だった。

全く どこまで素敵くたんなんだい、君は？

「ま、そういうことさ。件の殺戮鬼だつて、決して僕たちには理解できない思考ルーチンで動いてる訳じゃあない。彼には彼なりの理由があつてやつてることだからね」

どこまで逸脱したところで、人間は所詮、ヒトという種の枠組みからは抜け出せない。

でも、だからこそ。

その壁すらも突き破る存在の出現を、切望して止まないのが、人間の性。さが

「えっと、つまり、……神斜さんは辻宮さんを殺してない、ってことなんですか？」

「おや、君も殺戮鬼君の正体を知ってたのかい？」

「朽木先輩に聞きました」

「ああ、成る程。……ま、そういうことさ。第一に彼が最初に殺すべき女性は或華君をおいて他にないし、第二に彼が殺したのなら密室トリックだなんて小賢しい真似はしないだろうさ。そもそも

翡翠君の存在を知っている者なら、密室にする意味のなさを、充分に理解している筈だからね」

地獄耳というには地獄耳過ぎる地獄耳を持つ極悪人。

正義の価値を知らながら、さながら深海魚が浅瀬に憧れるように、その場所に辿り着けない憧れに灼かれる少女。ワースト・ワン

いやはや どうにも世の中、世知辛いね。

「あ、そっか、そうですね。……じゃあ、翡翠さんのことを知らない誰かが犯人なんですか？」

「それも違う。それなら、翡翠君が孔谷君に犯人を告げることです、

とつくに事件は解決してる筈じゃあないか」

「え……あれ……？」

そう。

となると答えは一つしか いや。

「二つとも三つとも言えるところが……なんていうか、難儀だよね」
「？」

ともあれ、この舞台の主役は僕たちじゃあない。犯人逮捕だなんて疲れることはせずに、のんびりと事の顛末を見届けることにしようかな。

第四章 幕間 (後書き)

えーと、今更ですが、この作品に出てくる大地や或華その他のキャラは、僕の他の作品にいる彼らとは別物（別世界の住人？）です。バックボーンは大体同じですけど。

第五章 † 回顧、連結、果てに自己完結 †

第五章 † 回顧、連結、果てに自己完結 †

(Dear broken world)

13 . 孔谷透

休日二日目の午後、予定通りの時間、みつきと共に還界と合流し、行動を開始する。目的地は勿論、神斜が狙っているだろう翡翠。翡翠や伊賀奇先輩の言によれば殺される心配はないだろうけど、半殺しならアリ、だとか屁理屈を使われる可能性も否めないし、他にアテもない以上警戒するに越したことはない。の住む時計塔。異変に気づいたのは、後は階数にして二つ分の階段を上れば、時計塔に辿り着く地点でのことだった。

「……変だな」

一旦立ち止まって、耳を凝らす。

「どうかしたの？」

「いや……さつきから呼び掛けてるんだけど、返答がないんだ」

先程から 翡翠に連絡が取れない。無論、どれだけ逸脱した基本性能を誇っているとしても彼女とて人の子、眠ったり他の何かに熱中しているときは通話できないこともある。しかし、こんな太陽がほぼ真上にある時刻に眠る趣味はない筈だし、何か手が離せない事態にでも遭遇してるんだろうか。

「翡翠の？」

「ああ」

さすがに裏事情に深く通じている黙禱部、翡翠のことも知っていた。

還界或華、識別称号《白いあくま》。秩序立った闇を正式な手順に則って圧縮したような漆黒の黙禱部専用制服、すなわち勝負服（

一部の男子の間でのみ通称となっている）に加え、現在猫耳装備中。しかし、どうせなら尻尾も付ければよかったのに。伊賀奇先輩、意外と詰めが甘い。

「しかし、似合ってるね」

せつかなので、褒めてみた。

「わ、私だって好きで付けてるんじゃないわよっ！……あの青ダヌキ、なんで角二つハンデのオセロであんなに勝てるのよ……！」

記憶によると、確か一般人相手なら角四つのハンデでもいけると言っていた気がする。さすがの最速思考でも、『白いあくま』相手には慎重になった、ということか。

というか、五十戦もやったのか。負けが確定した後も。

さすが、負けず嫌い。そしてサド。

「別に、今なら外してもバレないんじゃない？」

「無理ね。翡翠の耳があるもの」

あ、そうか。どうも日常的に彼女と通話していると、その存在の特異性を失念してしまいがちになる。

遠辺翡翠。識別称号《ファースト・ワン先天的悪性子女》。

決して人前に姿を現さず、しかし学校内のあらゆる誰かを、その本人自身よりも深く理解している観測者。発汗や呼吸・脈拍、果ては心音から内臓の健康状態まで、知ろうと思えば彼女に探れない情報はない。だが真に厄介なのは彼女の根っからのお人よしであり最上質であり、同時に自らを正義という立場に置くことができないことで。

一言で言えば。

彼女は、他人をまるで自分自身のように捉えることで、対象者の全てを共感する。

故に 彼女と対話することは、深淵に立って自問自答する作業に酷似する。

「……本当、嫌な女だよな」

ホント、あのおせっかい焼きは。

自分の手を煩わせずに、無邪気に無意識に人を傷つける。

「……何？ それ、もしかして私に対する不満？」

独り言を聞かれた。

「まさか。こないじり甲斐あ……もとい心強い援軍がいてくれて、助かるよ」

俺は武闘派じゃないから、物理的な防御には自信がない。この先、神斜大地 《未完の終焉（unbroken）》 や、それに準じる危険人物と遭遇した場合、彼女がいるかいなかで大分行動と結果が違ってくる。

「助かる、ね。……どうでもいいけど、そんな死んだ魚みたいな目で言っても説得力感じないわよ」

「悪かったね」

よく言われるけどさ。

人の容姿に文句を付けられても困る。訂正。困らないけどつまらない。

「それに、私が貴方を手伝うのは、親切心なんかじゃないわ。あの男に借りを作らないためと、……身内の不始末を処理するため。それだけよ」

身内 そう言ったときの彼女の表情は、自分の中に渦巻く感情をどのベクトルに向けるべきか迷っているように複雑そうだった。

その、感情の処理に不慣れな様子は、どこことなく律先輩と重なるものがある。

もつとも、もう過去の人だけどさ。

「それは別にいいんだけど」

彼女の腹心に興味はない。むしろ理想としては、神斜と一戦交えてくれる展開を密かに希望してたりする。

この二人が出会ったとき、何が起こるのか。それはきつと、俺が感情らしきものを取り戻すのに、大いに参考になる。明確な根拠を提示することはできないけれど、この仮説には、俺にしては揺るぎ

のない確固たる確信がある。

と。

「行こ、くーや。お姉ちゃんが待ってるよ」

今日に限って口数の少ないみつきが、穏やかな重圧で先を促した。

「……そう、だな」

今日のみつきは、朝からどこことなく雰囲気が違う。

まるで何かを覚悟しているように、決意しているように、いつもの笑顔を保ちながらも、張り詰めた空気を纏っている。

なんだろう。久しぶりに姉に会うから、緊張してるんだろうか。

遠辺みつが、遠辺翡翠に会いに行く。

それは正直なところ、俺にとって、あまり心穏やかでない事態だった。

……心穏やかでない？　なんだって？

一体俺は　何に、恐怖を感じているっていうんだ？

昨日、とある事情で演劇部を訪れた後、学校からの帰路。事情を説明した俺に対して、みつきは予想外にも「わたしも行く」と言い出した。

「……いいのか？」

なんで、今になって急に？

「うん。お姉ちゃんとは、いつかこうしなきゃいけなかったから」
穏やかながら、決意のこもった声色。

その瞳は、淀み一つない光に満ちて。

その強い覚悟を。始まることのない俺が、止められるわけもなく。

「……わかった」

俺は、ゆっくりと頷いた。

「……どうしたの？　行くなら、先を急ぎましょう」

「ん。……ああ」

踊り場で止まっていた俺たちは、再び目的の地へと歩き出す。し

かし、一歩足を踏み出した途端、今度は還界が、動きを封じられたように停止した。

「どうした？」

「大地？」

かすかな呟きは、俺に向けられたものではなかった。

怒りと驚きと喜び、その全てを混然とさせた繊細にして絶妙な声色で。

まるで雷に打たれたように、三白眼を見開いて。

まるで見えない巨大なハンマーで殴られたように　　還界は、飛び出していった。

「おー」

声を掛けよう、と思った瞬間、彼女は風圧と共に姿を消していた。……やっぱり、本職は格が違う、か。

「……となると、見逃せないな」

「行こ、くーや」

「ああ」

彼女の通過したであろう道を、腰に掛かる僅かな重みの意味を感じながら、野次馬根性全開で全速力で追いかける。

殺戮鬼と悪魔の邂逅。

およそ常人とは懸け離れた二人の関係は到底度し難く、しかしあるいは彼ら自身にも説明できない何かがあつて。

その顛末は　あらゆる意味で予想通り、俺がヒトになるための重要な一ピースとなった。

その途上。

屋上への入り口に置かれた、五十瀬正義の死体を、通り過ぎた。

14・神斜大地

実を言えば　大熊が生命体じゃないってことぐらいは、フェミ

二ストに定評のあるオレと言えど、貫いたときの手応えから理解していた。やはり、生きているモノとそうでないモノでは破壊したときの充実感が違う。

で、どう改良してみたところで所詮は命令で動く機械。スピードもパワーも警戒するほどではない。後ろから強襲されようが余裕で避けられるレベルの脅威だ……と思ってたんだが。

「……ったく。最高のタイミングだぜ、或華」

さすがのオレも 最愛の女、還界或華の登場とあつては、心穏やかではいらなかった。むしろ、その一瞬の隙を見逃さなかった深澄をこそ褒めるべきだろう。

「グッジョブ」

褒めてやった。

「……………」

無言で親指を立ててきた。誇らしげだ。

さて。

現在オレは、階段の縁ふちに咄嗟に伸ばした左手の指先の力だけでどうにか落下を免れている。本来のオレなら一秒と掛からず復帰できるシチュエーションなんだが、利き腕はイカレてる上に、背中背中の傷は思ったより深い。とめどなく血が流れ出ていくおかげで、次第に思考がぼやけてきやがる。

「……ありがと、ね」

不意に。

金髪ツインテール無口美少女が、そんなことを呟いた。

「……何が？」

「わたしが今、生きてること」

奇妙なタイミングで、お礼を言われた。

確かに、あのまま投げ出されていれば、大怪我は免れなかっただろうが。別にお前のためなんかじゃなく、下手に回避とかして熊が制御不能になって、万が一にでも死なれると困るんで、右腕を犠牲にしてまで確実に保護しただけなんだが。まあそもそも、勝敗なん

て初めからわかりきっていたことだし。この程度の小物に遅れをとるオレじゃない。

って、今絶体絶命なんだけどな。

「いやあ。男として当然のことをしたまでサ」

クールな雰囲気を全身に漂わせてみる。背中を切り裂かれた折に、つい反射神経全開で振り向いちまったせいで、額からも流血していた。垂れ落ちる血が瞼を覆う。チ……そろそろ、指が痺れてきやがった。

「なんで、わたしを助けたの？ わたし、あなたのこと好きに、ならないよ？」

変なの、と付け加えて、深澄は首を傾げる。まるで、結果の伴わない行動など無意味だ、とでも言うように。

そのどこか機械的な仕草に、こんなときだつてのに思いを馳せた。識別称号、《人間嫌い（アンチ・ヒューマン）》。

たかだか知能が、生存能力が高いというだけで地球を我が物顔で占有する人間という種を憎む、人間の少女、か。

ハ。これ以上ないつてくらいに、矛盾してやがる。

それが人間だつてコトに、お前は気づいてんのか？

「……さあて、な。オレはいいものは愛でるし、そうでないものは無視するか視界から消す。お前はいいものだ」

それでもつてかわいいは正義だ、と結ぶ。果たして、深澄は表情を隠す前髪をちよいちよいといじり、

「ありがと。さよなら」

感謝の言葉もそこそこに、容赦なくオレの指を蹴り飛ばした。

ハ。上等だ。

さすがに、誤魔化し切れるもんじゃあなかったらしい。

落下、落下、落下。瞬間的に体重を失い、風を切る感触が、待たなしで身体を蝕んでいく。さすがにここで気を失うと一巻の終わりなんで、左腕の肉を噛んで意識を繋ぎ止める。

「死んじまつてる右腕をクッションにすれば、なんとか……」

なるわきやねえが、オレならどうにかなる。多分。

頭から落ちるように体勢を入れ替え、落下地点を確認。屋上の床は後もう少しのところまで迫っ

「馬鹿野郎！ 何してんだっ！！」

或華が。

全てを許容するような包み込むような笑顔で、大怪我は免れないであろうオレを受け止めるように両手を広げて、待っていた。

マズ、い。マズいマズいマズいマズいマズい……！！

このままじゃオレは、間違いなく或華を、コ、ロ／こんな望まない形で。／だが、チ、チの巡らない脳はうるんな思考しか許さず、衝動のみを捉えて意思と成す／逃げる、逃げ逃げ二げる、お前はこんなところで されるような価値じゃないっ……！！

「或華アアアア つ！！」

最大限の殺気を滾らせ、そこを退け、と警告する。

だが、還界或華は。

オレが認める最強の女は、一步足りとも引くことがなく。

「馬鹿ね。これで、貴方は」ずぶ、り。

私を二度と忘れられないわ、と。

勝ち誇ったように。自らの心臓を抉り取った相手に向かって。恋人に睦言を囁くように、呟いて。

魂を譲り渡すような接吻を交わし。

絶頂に達したように、緩やかに倒壊した。

15・還界或華

人は、一人で生まれて一人で死ぬ。

いくらお互いの情報を交換しあったところで、いくら肌を重ね合わせたところで、いくら時間を共有したところで、突き詰めれば他

人は他人。限りなく近づくことはできても、決して交われない漸近線。^{ぜんきん}

そんな当たり前のことが 私には、どうしても耐えられなかった。

「大地」

見上げた遙か先、螺旋階段の終点付近。

私と同じ喪服じみた漆黒の衣装に身を包む少年 神斜大地との再会。彼は、階段の縁に辛うじてかけられた左手だけで、自分の全体重を支えていた。

正直な話 彼が瀕死の状態であつたことに、それほど驚きはなかった。

だって、自業自得だもの。

あんな不安定な歩き方をしていれば、どこかで転ぶのは当たり前。自分の欲望を押し付けているだけでは、自分が望むものだけを一方的に略奪していくだけでは、やっていけない。

そう教えてくれたのは、大地。他ならぬ、貴方だったのに。

大地の体が、ずりりと下にズレる。利き腕が潰れた今の彼に、文字通りもう手は残されていなかった。

「……ざまあないわね」

無様というなら、人間としての誇りさえ失って獣と化した今の彼ほど、無様な存在はいない。ライオンや鷲が人間に駆逐されたように、突き詰めていけば強靱な単体は脆弱な群体に敵わない。

でも、大地？

貴方はもう、人の輪には交じれないでしょう？

それでも貴方は、全てを壊そうと、世界で一番美しいものを貶めようとするんでしょう？

なら 特別に、手伝ってあげるわ。

一人きりなのは、私も同じだから。

「馬鹿野郎！ 何してんだっ……！」

大地の咆哮が上がる。上と下で目が合う。空気にさえも敵愾心を

燃やしているような鋭利な双眸に、ほんの少し逡巡と焦燥が混じる。
あらあら。そんな泣きそうな顔しちゃって。

ホント、いつまで経っても弱虫なんだから。

確かめるまでもないけど、そもそも、貴方が男を殺すようになった理由からして、殺戮鬼になった理由からして、臆病者の発想よね。私といると我慢できそうになかったから、私から逃げるために、世間から隠れる大義名分を作った。

そんなところでしょう？

「でも、いいわ。許してあげる」

そんな貴方の弱さが、今このとき、私にとって最大のチャンスを生んでくれたんだもの。

主の意思に反して鎌首を擡もたげた大地の左腕が、私の心臓を狙う。

そう。それでいいの。

そうやって私と（を）、交わり（侵し）なさい。

「或華アアアア　っ！！」

「猛獣が雄叫びを上げる。」

その慟哭は、どこか孤独を嘆いての啼泣ていきゅうに聞こえた。

利害の一致、利用され利用しあつた関係、喰う者と喰われる者。私たちの関係は、せいぜいそんな風に形容されるかもしれない。でも　そんなことは、それこそ関係がない。

「馬鹿ね。これで、貴方は」ずぶ、り。

私の心臓に、断罪の杭（神斜大地）が突き刺さる。私と彼が一つになる。

一人では生きられない私と、これから先も自身が自身であるために、同位の誰かが必要だった貴方は、きつと、出会おうべくして出会った。

これで貴方は強くなり、これで私は満たされる。

これで貴方は　私を二度と、忘れられないわ。

最後に少し、彼の呼吸を、生の息吹を奪い取って。代わりに私の呼吸を渡す。

疑うことのない、至福のまどろみに包まれて。

私の時間は、永遠に停止した。

第五章⁺回顧、連結、果てに自己完結⁺（後書き）

いやー……諸事情により投稿（というかPC自体）と大分疎遠になってしまいました。話の続きを待つて下さっていた方（いるといいんですけど……）、大変申し訳ありませんでした&お待たせしました、第五章です。ついでにこれまでの章も手直ししました。途中で（・・・）が入るのはその部分を強調してるルビ振りなんですけど、携帯の方ではルビが（）で表示されるので、どうしても読みにくくなってしまうようです。ご勘弁下さい。で、次にいつ機会があるのかわからないので、最終話まで一気に行きます。よろしければ、どうか後しばしのお付き合いをば。

もましてや狂喜も、何一つ浮かんで、こなかった。

その瞬間　悟った。悟ってしまった。

俺はもう、壊れてしまったモノなのだ、と。

『本当に、そうかな？』

「……え？」

意外と言えば意外、必然と言えば必然に。

俺の思考に異議を申し立てたのは、遠辺翡翠だった。

『ねえ。最近のクーヤって、ほんの少しだけど、楽しかったり悲しかったりしたこと、あったよね？』

子供を諭す親のように、翡翠が優しく語り掛けてくる。

「……ああ」

例えば、律先輩を看取るみつきを遠くから眺めていたとき。

例えば、朱野原比奈と話していたとき。

例えば　遠辺翡翠と、話していたとき。

ここ最近、ほんの少しだけ、人間らしさの欠片に触れる機会があった。

でもそれは、部屋の隅に落ちていたパズルの一ピースを見つけたようなもので。

とてもじゃないけど、俺の中の人間が完成するには、ほど遠い。そもそも全てのピースを集めたところで、完成した一枚の絵になるかどうか疑わしい。

『じゃ、逆に考えてみて。普通の人だったら何か感じるだろう場面で、クーヤが何も感じなかったことも、あったよね？』

「……ああ」

例えば、貫いた俺^{ガラス}自身。

例えば、五十瀬正義と神斜大地の決闘。

例えば、雨の帳、捨てられていた猫の末路。

例えば　ついさつき通り過ぎた、五十瀬正義の死体。

何も感じませんでした、の一言で済まされる筈もない出来事で。

俺は、何も感じませんでした。

『うん。 さて問題。 この二種類の結果が起こった状況には、決定的な差があります。 それはどこでしょう？』

「状況の差、だって……？」

何を聞かれているのか、よくわからないんだけど。

『じゃあヒント！』

早い気もするけど。

『みつきを先にわたしのところに来させて、クーヤは五十瀬先輩を見てきて。それが 最初で最後の、ヒントだよ』

答え合わせは屋上で。

そう言つて、翡翠は通話を絶った。

「……なんだつて？」

「……わたしにも聞こえてたよ。クーヤ、どうする？」

いつになく他人行儀な目で、俺を見据えて、みつきは微笑む。

彼女は、この不可解な提案に対して、完全に選択を俺に任せていた。

「俺は……」

半信半疑ながらも 翡翠の提案に乗らない理由はなかった。

だって、駄目で元々なんだから。たとえば翡翠がみつきと二人きりになりたいとか、その程度の意図で俺に嘘をついているとしても、それはそれで興味深いし。

「……いいのか？」

念のため、みつきに尋ねる。

遠辺みつきと遠辺翡翠。

最善と最悪の両端にあつて、どこか根底で似通ったもののある双子。

彼女たちの仲は、同属嫌悪以上の計り知れない何かが原因で、あまり芳しくないはずだけど。

「うん。それでクーヤが救われるなら」

清々しいほどの即断だった。

その笑顔は、一片たりともいつもと不変の、普通の笑み。

「わかった。それじゃ、行ってくる」

だから、安心した俺は、みつきを置いて駆け出して。
それがあるいは、みつきの笑顔を見た、最後の瞬間だった。

そのときの彼女の心情を　俺は、恐らく一生活理解できないだろう。

全てが終わった後。他人と他人がわかり合うことなんて不可能で、でもそれ故に　なんて当たり前の事実を嫌っているほど思い知らされてきた俺は、今更のように心から思った。

16・遠辺翡翠

時計塔の中腹には不自然な突起があつて、まるで獲物消化中の蛇みたいな趣になっていて、そこがわたしの住処だった。

こぼこぼと気泡を建てるチューブの入った清潔な水槽を泳ぐ、色鮮やかな熱帯魚。画面を二分割できる大型テレビの先に散乱する、大量のゲーム機器。ソフトの種類は、わたしという都合上、大体が音ゲーかRPG。使い込まれた木製のちゃぶ台を挟む形で置かれている、二人は寝転べる太さのソファ二つ。

「服、サイズ合うかな……」

嫌な想像をしてまった。まあそのときはそのとき、唯先輩がアリスを呼び出して、貸してもらおう。聴いている限り、みつきちゃんが後どのくらいで来る設定になっているのかはわからないけど、クーヤが来るのにはまだ時間があるだろうし。

バスタオル一丁のまま、乾きかけの髪をドライヤーで温めつつ、衣裳部屋へ。クーヤのあらゆる希望に応えるために用意した、女の子にはイマイチよくわからない趣味の服のコーナーを通り過ぎ、クーヤと会う（この）日のために取っておいた、至って普通の制服に着替える。

これを着るのは何年ぶりだっけ。

「えっと、みつきが生まれてからだから……」

大体一年前くらいかな？

ちよつと胸周りがきついのは、嬉しい痛みというコトで。

一年の時を経て、腰まで届くくらいに長くなつた髪。それが、わたしがクーヤを待った時間を表す、目に見える証。

わたしには見えないけど。

制服のポケットから、入れておいた大きなハサミを取り出す。右手で髪を掴んで安定させて、左手でハサミを開く。後ろ手で切る形になるけど、わたしには関係ない。

「さよなら、遠^{わたし}辺翡翠」

迷いはなかった。

バサリ、と重さを感じさせる音を立てて、散乱する髪。

「後で、掃除しなきゃね」

全てが終わつた後で。

ともあれ　これで準備は整つた。

これまで感じたことない至福の瞬間への期待に、思わず身を震わせる。

「待つてたんだよ……ずっと。クーヤ」

透明な殻の向こうからの彼の告白を、断腸の思いで断つたその日から、大体一年。

彼とわたしを隔てるものを排除するための舞台はようやく整つて、もうすぐ全ては完結する。それが彼にとっていいことなのかどうかは、価値の重さを考えることを捨ててしまったわたしにはわからないけど。

今迎えにいくよ、クーヤ。

わたしは、ずっと待つてたんだから。

わたしは、わたしに戻る日を。

17・孔谷透

そつえば、みつきと出会つたのは、今から丁度一年前くらいの

ことだっけか。

どんな機会があつて知り合ったかは、よく覚えていない。多分、その前から交友があつた翡翠が紹介してくれたとか、そんな理由だったんだと思う。確か、俺が初めてみつきと対面したとき、彼女もそこにいた気がするから。

それにしても　今更ながら、ふと思った。

みつきは、なんでここに送られてきたんだ？

異端者を世界から隔離する、《E》というシステム。

この国を最深部から操作しつつも、決してその正体を悟られることのない黒幕組織（組織かどうかすら不明なところが、巧妙極まりない）。

具体的な選別法はともあれ、俺が今まで《学園》で遭遇した人たちは、確かにどこかしら歪んでいた。

みつき以外は。

「訊くわけにもいかないけどさ……」

興味は尽きないけど、さすがにね……。

「で……五十瀬先輩、か」

ノーマルエンド

五十瀬正義。《普通真人間》。目立った特徴のない優しい人。

ただ、彼の優しさは、それだけしかないせいで、突出しすぎてしまった。人を憎めないくらいに。

恋人を殺した殺戮鬼さえも　本当に、憎めなかったんだろう。

だから、返り討ちにあつた。

……翡翠が伝えたいことも、その辺りにあるんだろうか。

《答え合わせ》。彼女はそう言った。

「全く……落ち着かないよな」

自分より自分を詳しい奴がいる、っていうのは。

彼女の答えが、俺の真実とは限らないけど。

俺が今出せる答えよりは、より正答に近いだろう。

神斜大地は、森守深澄は、いつの間にかいなくなっていた。残された還界或華だったモノの残骸は、ひどく綺麗だった。

心臓だけを、まるで初めからなかったように抜き取られていた。惜しむらくは返り血が彼女の顔を穢けがしてしまっていることだけど、それはこれからいくらでも改善できる失策だろう。少なくとも、あの殺戮鬼はそう考えているに違いない。

処女作を作り上げた彼には、最早歯止めなど存在しない。己が欲望のままに狩り尽くし貪り尽くし、無人の荒野でその生涯を晒さらい、自らを終えるだろう。僅かばかりの羨望と共に、そう思った。

そして、屋上と校舎を隔てる鉄扉てつびに寄りかかる五十瀬正義モリと対面する。

瞬間。

尋常を遙かに超えた既視感に、胃から這い出るものを抑えきれなくなる。

「な　　ハ、グ、エ」
混乱。

意味がわからない。意味に意味を喪失する。

五十瀬正義は　腕を組み、胡坐をかいて、座り込んでいた。

あのとき、律先輩と将棋を指していたときと、全く同じ格好で。

深々と突き刺さったナイフの位置は、いつまでもなく律先輩と同じ腹部。

再現というには　余りにも同一すぎる模倣。

あたまがおかしくなりそうだ。

だって、これはあり得ない。存在してはいけない光景だ。

何故なら

「ッは、はあっ、はあっ……ふう……」

ここ最近見た死体の中でも、予想外だったという点で、一番の衝撃だった。体の中身が空っぽになるくらい汚物を廊下に撒き散らし、腐臭と死臭が交じり合って更なる吐き気を催してくれる。白熱した思考は思っように凍らず、納得のいく回答を求めて勝手に虚数域の海で試算を始める。

だけど　　そんなことをするまでもなく。

俺は、全てを理解していた。否。理解させられていた。
考えるまでもなく、世界最悪のお人好し（ワイスト・ワンスケープゴート）に。
この殺人に、計算はなく。

純粹に純一に純朴に純真に純正に純然に、感情のみに起因する行為なのだ、と。

感情は、人間の中でも最も尊ぶべき普遍で。
俺がずっと見続けていた、とある少女の原風景。

「そういう、ことか」

唇を強く噛み、意識を覚醒させる。

俺というカタチの欠陥。それを埋める最大の鍵となる彼女は。
時間軸を一年前へ。全ての始まりと俺の終わり、その先端を回顧する。

俺の欠落とみつきという平満。びゅうまん遠辺みつきと遠辺翡翠、二人にして一人の点対称。殺された二人の恋人と、満たされた二人の恋人と、殺されるべき一人の恋人。無感動と有感動の境界線を分かち引き金の解。

「……わかったよ。全部、わかった」

あるいは、今までの俺の停滞は、この答えを導き出さなくなかったが故の凍結だったのかもしれない。
それでも。

気づいてしまったからには 決着は、つけなければならない。
他ならぬ彼女が、それを望んだからには。

俺が、人間になるために。
最後の殺人を、始めよう。

第七章　　ふたりでひとり、ふたりはひとり

第七章　　ふたりでひとり、ふたりはひとり

(I s s h e h e r ?)

18・遠辺みつき

「大好き」

『大嫌い』

わたしたちの会話は、一年前と同じように始まった。

それも当たり前。だってわたしたちには、元々これしかないから。場所は、屋上にある尖塔型の時計塔、さらにその尖端。前日の雨でまだ濡れているそこにわたしたちは隣り合って座って、沈み行く夕焼けを眺めている。

「……久しぶりだね、お姉ちゃん。元気だった？」

『うん。みつきは……聞くまでもないよね』

顔を向けずに、わたしたちは話す。

「あ、何それ、どういう意味？」

『どうって、そのままの意味だよ？』

「むー。お姉ちゃんのいじわる」

そんな当然のこと、言わなくなっていたいいのに。

「でも、いいの？ このままだと同じじゃないの？」

一年前と。とわたしは聞く。

『違うよ。今のクーヤは、ちゃんと罪を持ってる（人間してる）もん』

ずっと逃げてばかりのあの頃と違ってね、とお姉ちゃんは答える。

「お姉ちゃんのお陰でね」『わたしのせいだね』

わたしは微笑んで、お姉ちゃんは微笑んだ。

同じ行動をとったわたしたちは、でも決して重なり合えない二人。こんなに近くににいるのに、わたしたちはとっても遠かった。

『……ごめんね』

お姉ちゃんが、不意に謝った。

どんなときになっても、どんなことが起きても、必ず悪とされる方に身を置くために生きているお姉ちゃんが。そうすることでは、善いものがそこにあることを感じられないお姉ちゃんが。

「いいよ」

わたしは首を振って、体重をお姉ちゃんに傾ける。わたしの身体が少しずつ少しずつ、お姉ちゃんの身体に沈み込んでいく感覚。

それは、役目を終えた太陽が地平線に没するイメージに似ていて、わたしが後に遺すのは、残照のように贈り手のいない賛美歌。^{アンゼム}

『……わたしはみつきちちゃんを利用したよ。みつきちちゃんが生まれたのもみつきちちゃんが死ぬのも、全部わたしの身勝手のせい。それをみつきちちゃんは 許してくれるの？』

縫るようにお姉ちゃんは尋ねる。だってこれは、お姉ちゃんにとって初めての、悪も善もない、自分の意思だけを物差しにしてとった行動だから。迷っちゃうのも、仕方ない。

「うん。だってわたしは、遠辺みつきだから。わたしは、わたしを許すよ」

くーやは、お姉ちゃんのことを、他人をまるで自分自身のように捉えることで、対象者の全てを共感する、と言ったけど。それは裏を返せば、お姉ちゃん自身も、常に自問自答を繰り返したってことでもあって。

その深い苦しみからお姉ちゃんを解放てるのは、お姉ちゃんの他人ではない、わたししかいなかった。

『……ごめんね。ありがとう。みつきちちゃん』

「ううん。ありがとう。お姉ちゃん」

そこで、わたしたちを溶かし合う作業は終わって。

わたしたちは、ずっとずっと昔のわたしたちとして、一つになっ

た。

19・孔谷透

神斜は苦勞して螺旋階段を上ろうとしていたみたいだったけど
買出しの度に下界に下りてくる翡翠が、いちいちそんな面倒なも
のを使うはずがない、というところには頭が回らなかったらしい。

「確かこの辺に……お、あつたあつた」

赤いボタンをポチッと押すと、巧妙に壁に偽装されたエレベータ
ーが開く。乗り込む。目的地は一つしかないから、回数表示はもち
ろんない。

数十秒の軽い浮遊感の後、ドアが再び開く。そこは、翡翠の家の
リビングだった。

「ここに来るの、久しぶりだな……」

何度かきたことはあるんだけど、何故かすれ違いになってしまっ
て、会うことができなかった。前に会ったのはそう、一年前の

「……あれ以来か。はあ……」

気が重い。

いや、気分は軽くなったんだけど。

さつきから、徐々にだけど、俺に感情らしきものが戻りつつある
のを感じている。人間気の持ちようで世界はいくらでも輝いて見え
る、とは誰の言葉だったか。世界が実際はどんなに醜くて見るに耐
えないものだとしても

「関係ないね。そんなこと」

伊賀奇先輩の言を拝借してみる。

実際など不要。真実など不要。

ただそこに、俺たちの世界があればいい。

思考が逸れた。やはり、俺の無意識はとことんこの件について考
えたくないらしい。

「さあ 現実に着付けにいかうか」
屋根裏から、この世界の天辺へと上る。
進入を拒むような突風。構わずその場所へ辿り着く。
そこには。

こんにちは。久しぶりだね、くーや。

一人の少女が、待っていた。

第七章⁺ふたりでひとり、ふたりはひとり⁺（後書き）

ふゆき は こんらん している！

…… なんだか話が消えたり消えたりしてるなあ、と思っただ方。全て機械音痴の作者のせいです。申し訳ありません…… orz

最終章 † 終わり始まる物語 †

最終章 † 終わり始まる物語 †

(I do not like you . But I love you .)

20 . 孔谷透

少女は、あの日のように半没の夕陽を背に、不安定な足場の上に臆することなく佇んでいる。

その表情は穏やかで。二度と光を映すことのない瞳は、真っ直ぐこちらを見据えている。

俺が世界で一番好きだった眼光は、すっかり失われていた。それは一年前、彼女が俺を拒絶した確かな証だった。

「……待たせたね。随分と」

うん。ホント、待ちくたびれたよ。

少女は、他に形容するあらゆる言葉もなく、微笑んだ。

この場所こそが俺の原点。彼女こそが俺の始点。

「なあ」

ちよつと待って。せっかくだから、初めからにしようよ。

俺の言葉の先を感じ取ったのか、少女は僅かに慌てたように俺を制した。

「初めから……っっていうと？」

辻宮律から始まって、わたしで終わるまでの道のりだよ。

少女は、物語を読むように答えた。

なら、そうしようか。

律先輩には、色々迷惑を掛けたしな。

一つ目。

辻宮律。

「と言つても……別に、不思議がるほどの事件でもないだろ？」

一番自然な解釈が、単純に正解なんだから。

本当に簡単な話だ。現場は密室で、二つある鍵の一つは殺された律先輩が持つていて、もう一つは俺が持つていた。それだけで、説明は充分だ。

「そうだな……強いていえば、律先輩は本物だったよ。それは感動した」

優先順位を違えないという辻宮律は。

一局の将棋に賭けられた五十瀬正義の命を、迷うことなく自らの命より上位に置いた。

タイムリミットまでに、伊賀奇先輩のように逆転の手を思いつくことはできなかったけど。刻々と抜け落ちていく血を完膚なきまでに思考から排除したあの潔さは、彼女にしか出せない神域だった。

それで、何か感じるものはあった？ と少女が問う。

「ああ。危うく惚れそうだった」

それは危ないね、と少女は笑った。

そして二つ目。

五十瀬正義。

「しかし、五十瀬先輩は……なんていうか、不憫だよな。結局最後まで、個人として見てもらえなかったなんて」

誰でもよかったわけじゃないよ、と少女は言った。

ある程度俺に近い人である必要があったのだ、と。

「範囲で指定してる時点でもうなあ……」

俺に、最後の発見をさせるためのお膳立て。

蛇足として、犯行手口を同一にすることにより、犯人が単独犯と思わせるための殺人。

「伊賀奇先輩辺りなら一発で気づくと思うけど」

大丈夫だよ。あの人は理解しても解決しないから、と少女は微笑

む。

その通りだ、と思った。

そして最後。

俺自身。

難問といえは　これが一番の難問にして最大の鬼門だった。

そもその大前提。俺が《Ⅰ》に選定された理由は、決して心が欠落しているからではなく。

わたしがくーやを拒絶したあの日から、くーやはくーやを拒絶したんだよね。

遠い昔を懐かしむように、少女は言った。

その通りだった。

目の前の少女に、俺が想い焦がれた彼女に否定された俺は。俺にとって理想の偶像を、この孔谷透みつきの中に作り上げた。

だから　俺がみつきと行動しているときに感じた俺の感情は、みつきのものとして処理された。

喜びも怒りも哀しみも楽しみも。

その奇異にして異端な逃避法こそが、俺が持つ最大の歪み。

故に、その識別称号を《透明な殻を嘆く雛》ウォーニアウト・カレイドスコフ。

この世に生を受けてなお、一度たりとも世界と交わることのなかった遠い遠い領域外。

そんなことをしても。俺がここにいるという事実、ちっとも変わらなかったというのに。

“　「　月まで行けば、君の身の丈は変わるのかい？」　”

今更のように、神託めいた伊賀奇先輩の先見の言を思い出す。一体あの人は、あの時点でどこまで知っていたのか。どこまで理

解していたのか。

なににせよ　やはり、できることなら近づきたくない、怪物じみた人だった。

「今ならわかるよ。あれだけ俺を好きだった遠辺が、あれだけ遠辺を好きだった俺を断った理由が」

それは、俺から逃げ場を奪うため。

人間として　終わりを始まらせるための、一番最初の作業。

遠辺みつきを幻想した俺は、それ以降の人生を、自らの手で自らの足で自らの意思で、費やしてかなければいかなかった。

突然大海に放り出された蛙のように面食らった俺の心は、感情を欠落させることで防御策としたけど、そんな歪みが長く続くわけもなく。みつきがいなければ、俺は一ヶ月と持たず壊れてしまっていただろう。

「だから、みつきには感謝してる。……たとえ原因が、ある意味で彼女にあったとしても」

翡翠に鍵として利用され、俺に盾として使用され、それでも彼女は笑顔だった。

ずっとずっと、俺にとっての理想であり続けてくれた、最後の俺自身。

本当に感謝しています。

だから、もう。

あなたを苦しめることを、止めようと思います。

「……もういいだろ？　始めよう」

最後に、お願いしてもいいかな？

くるりと背を向けて、初めて俺から視線を外した少女は言った。頷くことで答えた。見えなくとも、彼女には関係ない。

ややあつて、少女は紡いだ。

遠辺みつきを、嫌いにならないで。と。

遠辺みつきを、嫌いにならないで。

ひどく人工的な括られた世界を眼下に、わたしは言った。

それは、とても身勝手な懇願で。卑怯で愚かな女なわたらしい、子供みじたものだった。

純粹潔白な《彼》を陥れ、わたしたちと同じ位置まで引き摺り下ろしし、あまつさえその手を真紅で穢した。

渴望していた《彼》の告白を躊躇なく断り、《彼》の求めるものをこの手で永遠に葬った。

傷つくと簡単に壊れてしまうから何重にも張り巡らされた防護壁の中にいた《彼》を誘い出し、殻を剥ぎ取った。

罪深さで言えば、わたしほど罪深い人間はきつと他にいないだろう。

だから、わたしは

「大丈夫だよ。それだけは、絶対にない」

返答は力強く。

《彼》は、決してわたしたちを否定しないと、断言した。

それは、殻の内にいることから来る自信とは違って、剥き出しの彼自身の言葉だった。

本当に？ わたしは、声の震えを抑え切れずに、最後の糸に縋る罪人のように哀れみを誘うだろう表情で聞く。

「ああ」

《彼》は一旦言葉を切り、世界をぐるりと一望した。その瞳に相変わらず強い光はないけれど。全てを包み込むような優しさが、心臓の鼓動を示すように灯っていた。そう、感じ取れた。

「……たくさんの人たちを見てきた。たくさんの意思と希望があつて、その全てが報われたわけじゃなかったけど。その全てが美しかったわけじゃなかったけど」

他人を求めるその心に。嘘なんて一つもなかったよ。

俺がそうであるように。

それが、この一年、世界を生身で感じて得たたった一つの答えだ、
って。

それだけは確かめた。それだけで充分だ、って。

《彼》は、爽やかな笑顔で、わたしの不安を吹き飛ばした。

「だから。……人間にすらなつてなかった俺は、ここから人間を始めようと思う。この世界で一番、人間らしい行動から」

《彼》が地面と水平に伸ばした左腕の先には、明確な決意を秘めた漆黒の拳銃。標準はわたしの心臓。

わたしはゆっくり目を閉じて、その瞬間を待ちわびる。

「……ありがとな。一年間、待ってくれて」

うつん。そっちこそ、ありがとね。

一年間、わたしを想い続けてくれて。

《彼》が苦笑する声が、最後に聞こえて。

わたしは、これ以上ない安堵に笑顔になる。

それは、世界で一番醜く儚い物語の終幕に安堵して、笑顔になる。
それは終わりから始まり、始まりに終わる物語。全てがそうであるように、始まり、そしていつか終わる刹那より短い素敵な夢。

だけど、きつと大丈夫。どんなときだって、物語の価値は、長さ
なんかじゃなく、一瞬の輝きで決まるものだから。二度と別たれる
ことのないわたしたちの物語は、他のどんなものよりも

「おやすみ。みつぎ」

一瞬、間があつて。

始まりと終わりを告げる空砲が、ハッキリと世界を壊した。

最終章[±]終わり始まる物語[±]（後書き）

どこから話せばいいものか……。

えっと、結論から言うと、全ての混乱の始まりはこの章の前にエピソードを投稿してしまうという空前絶後のミスから発生しました。

あれ、なんか急な展開だなあと思った方、本当に申し訳ありません……orz 今は直しましたので、ご安心をば。

あ、という訳でもう一話あります。今度こそエピソードに続きます。

＋エピソード＋

＋エピソード＋

0

孤独と書いてヒトと読み、
一人と書いてゼロと読む。

これは、俺がヒトになるまでの初めの一歩。
これが、俺がヒトになるまでの初めの一歩。

生まれたときから二人だった俺は、きっと人間以前のモノでしかなくて。

傷つけられることだけを恐れていた俺は、たくさんのモノを切り捨てて、ようやく人並みのヒトになった。

その代償として、たくさんのものを犠牲にした。友人とか年月とか、ひとりの少女の、あらゆる全て。もう謝ることの出来ない場所へ行ってしまった人もいるけれど、恐らく現時点ではまだ、謝罪をしてはいけないんだと思う。俺がこの世界で、どうにかこうにか生きている内は。……それでもいつか、頭を下げに行こう。全てが終わる、でもどこかでは何かが始まっている、そのときに。

だから、今はただ、傍にいた彼女だけを精一杯想おう。

本当に 彼女には、あるいは彼女たちには、感謝を尽くしても尽くし切れない。人間以前だった俺に、一体何を感じたのか。何故遙か高いところから、その手を伸ばしてくれたのか。その問いに彼女は、ただいつものように笑って、答えてくれなかった。……それでも、伝わるものはあった、気がする。今の俺には、少しだけ理解

出来た。

かくして、この物語は幕を閉じる。

けれどももちろん俺の汚濁と血の匂いに塗れた旅路は続く。

この壊れかけた世界で。みんなを救ってくれるとは限らない、冷たくもどこか優しい、淡雪のような儚さを持ったこの世界で。

確かな足場などない。日常は常に不安定で、ふとした拍子にぐりりと反転し、喉元に刃を突き付けてくる。

それでも。

殻を振り払った俺は、まだ未熟者だけど。

彼女が隣にいる間だけは、どうにかこうにかやって行ける。そう、確信していた。

一度名前を捨ててまで、ずっと隣で俺を想い続けてくれたその強さは、痛みを感じるほどに胸に刻み込まれているんだから。

最初の一步目は、愛する彼女と共に。
いつか、死が二人を別つその日まで。

さあ、人間を始めよう

＋エピソード＋（後書き）

……こ、今度こそちゃんとエピソードです、完結ですよ！ うん。
その筈です。ようやく終わりました。

無駄な所で右往左往ありましたが、とにかくにも、ここまでのお
付き合いありがとうございました。余計なことは語らずに、静かに
幕を閉じたいと思います。では、また機会があれば、そのときに。

……もっかい見直してこようっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3221c/>

終わり始まる物語

2010年10月8日15時03分発行